

日本IT書紀

03 未剖篇

卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

03 末剖篇

卷之四 曙光

029 和洋折衷

030 興廃在此一戦

031 電信

032 大日本帝国

033 火事場泥棒

034 成金

035 米騒動

036 大正デモクラシー

037 女性は太陽

029 和洋折衷

第二十九

和洋折衷

一

文化が伝わり根付くということは、そうそう生易しいことではない。モノが存在するということと、人がそのモノの意味を理解し、再生産するということは違う次元の話である。

例えば土器。

側面にこびついていた煤の放射性炭素測定で、BC一〇〇〇年プラスマイナス一〇〇年という結果が出た土器があった、とする。放射性炭素測定というのは、「C14」と呼ばれる炭素の同位元素が五千五百六十八年で半減する原理を応用するのである。炭化した穀物、木片、煤（すす）などに適用して、年代をさかのぼる。

実際、二〇〇三年の十二月、西日本各地の縄文時代後期から古墳時代前期および、韓国南部の無文土器時代の遺跡で発掘された土器に付着していた炭化物六十九点、炭化米二点、漆二点、建物柱七点など計八十点以上に対して、そ

のような総合評価が与えられた。

調査に当たったのは国立歴史民俗博物館である。

——測定値が正しいとして。

というのは、保存施設が不十分だと出土物が現代の空気中に含まれる炭素を吸収してしまうからである。おのずから放射性炭素測定の結果に重大な誤差が出る——可能性がある。

博物館は記者を集めて会見し、

「北部九州の弥生早期の始まりは、前一〇世紀、弥生前期の始まりは前九世紀末から前八世紀前半、中期の始まりは前四世紀前半である。四国の弥生前期は、前九世紀末から前八世紀前半以降で、北部九州より若干遅れる可能性もある」

と発表した。

同博物館は日本古代史学に一時代を築いた井上光貞、東大名誉教授の遺志を受け継ぐ権威ある研究機関なので、国が検定している教科書の記述にも影響を与える可能性がないでもない。

ただ、その発表には異論が存在する。

「弥生」

という雅やかな名を持つこの時代は、土器の形状と文様を指標にして編年が形成された。ところが、当時の社会を

再現する総合的な評価に用いられるのは、土器のみではないのである。

利器において石器、木器、金属器があり、埋葬方式に支石墓、甕棺墓、土壙墓があり、装飾品に貝釧、勾玉、ビーズ、黄金などがある。食生活においては水田耕作によるコメばかりでなく、粟の栽培が知られる。

つまりコメというのは、時代を表徴するファクターの一つに過ぎない。

このようにいうと、読者の中には

「教科書で習った日本史では、水稻耕作をもって弥生の始まりとしているではないか」と反論する向きもあるに違いない。

しからば、炭化米を伴出した最も古い生活遺跡が青森県に存在し、縄文時代のコメが確認されているという事実をどのように説明するかである。もし水稻の出現を条件とすれば、青森県は紀元前七世紀に弥生時代を迎えていたことになる。

本書が主とする目的はそれを論じることではないが、同博物館は結論を急ぎ過ぎた。コメの栽培を縄文時代にさかのぼらせるか、従来の「縄文後期」を「弥生早期」に変更するかという論議が成されなければならなかった。

そのことはこれ以上、問わない。

二

筆者がここで語りたいのは次のようなことである。

第一に、短粒米（ジャポニカ種）の発祥地である中国江南地方との地理的關係を考えれば、有明海沿岸の一角に水稻耕作の技術を持つ人々が上陸し、村落を形成していたとする同博物館の発表は、まったく無理がない。というより、わざわざ記者会見を開いて「発見」を報告するまでもなかった。

第二に、水稻耕作の場合、まず種籾がなければならない。だけでなく、田を作る場所の選定、水の引き方、畦の作り方、水温の管理、病気や害虫の駆除、収穫の仕方、脱穀の方法、さらに調理の仕方など、技術と道具が伝わらなければならない。

第三に——これが最も重要なのだが——、コメを食べるという習慣ないし思想、生活様式が伝わらなければならない。

青森県にも紀元前七世紀にコメが存在したが、畦（あぜ）道によって区切られ、そこに用水が引かれた水田が津軽平野に出現するのは紀元前後である。九州島の西北端に発した弥生の文化が本州島の北端まで、約二千キロの距離を行

くの千年を要した。第五「千年の時空」の章で論じたこととやや重複するが、古代というのは何ごとにつけ、時間がゆったり流れていた。

なぜか。

要するに文化の伝播とは、人の移住だったからである。集落の拡大と家族の膨張で、分割・分家が起こり、独立した集団が新たな土地に水稲を営んだ。つまりは「世代」というものが、伝播に要する時間軸の単位だった。

初期において、金属器や装飾品などは、大陸や半島から「完成品」がもたらされたに違いない。それが緩やかで少数の人の移動によったものか、それともある程度組織的な集団の移動であったかという疑問に対して、一定の解釈を与えるのは弥生式埋葬遺跡から発見された人骨である。

その詳細な計測結果によれば、答えは後者ということになる。

黄金の冠をかぶり、青銅の剣や矛を備えた集団が上陸し、そこに住んでいた人々を駆逐し、独自の集落を作るようなこと——騎馬民族征服王朝説——は、いまだに有効であるかもしれない。そのうち銅や鉄の原材料を仕入れ、列島の中で鑄造するようになった。最初は「模造」であり、次に「模倣」が始まり、技術の習得とともに独自の技術で製造が始まる。

先進の文物が請来されたとき、必ず旧の文化との間で摩擦が生じ、戦闘が起こる。仏教が伝わってこの列島に宗教改革が起こったとき、旧勢力を代表していた葛木、巨勢、物部といった氏族が減び、蘇我、中臣、大伴といった士族が興隆した。幕末維新の混乱というのは、別の見方をすればその一つであるに過ぎない。

明治初期に起こった士族の反乱とされる神風連の乱（一八七六年十月二十四日）、秋月の乱（同二十七日）、萩の乱（同二十八日）、西南の役（一八七八年二月～九月）などは、幕末維新の動乱に幕を下ろした戦いであった。

明治政府が最初に取ったのは「模造」である。本質は丁髷と二本差しの時代と変わっていないけれど、外見だけは「西洋」にしようと思えば考え、頭を散切りにし、行灯の代わりにランプを灯し、羽織・袴を洋装に改め、「西洋」の銃や時計や茶器を用いた。見よう見まねで田中久重が蒸気機関を作り、川口市太郎が三輪自転車を作り、その行き着いたところに「鹿鳴館」があった。

次いで模倣が始まった。

模倣とは、形ばかりでなく、精神の一部もそれに近似して初めて成立する行為である。つまり模倣には思想が必要であった。中村正直や福沢諭吉はその役割を担った。実をいえばここにおいて、日本は「和洋混交」の時代から脱し、

いわゆる「和洋折衷」の時代に移行していく。西暦でいえば一九〇〇年が一つの境目であるかもしれない。

三

「明治三十一年一月卅日印刷、二月一日発行」

の年紀を持つ「東京名勝吾妻橋鉄橋之真図」と題した錦絵がある。発行者は「日本橋区馬喰町二丁目十四番地、綱島亀吉」とあって、桜の花が咲き誇る隅田川にかかった国内初の洋風鉄橋「あづまばし」を行き交う人々の姿を描いている。

向こう岸に「吉原」、「富士縦覧所」、「金龍山」の文字が見える。金龍山というのは浅草寺のこと。

橋の下には俵を山積みにした船が行き、橋の両脇にガス灯が立っている。シルクハットの御者が鞭を振るう二頭立ての馬車や洋傘を差した丸髷の婦人を乗せた人力車が走り、かと思えば頭から爪先まで、鹿鳴館風の洋装の母娘連れがいる。

その近くに立ち止まって話をしている二人の男性を見れば、菅笠をかぶり、丁髷に脚半と、そのままの姿で東海道中膝栗毛に出てきてもおかしくはない。やや向こうに目を転じれば、羽織袴に山高帽、警官のそばに立つ少女は洋風

の帽子に振袖、足元は革靴とおぼしい。

絵そのものが和洋混交、和洋折衷の中間点にある。

これがあと十年もすると、丁髷の男性はほぼ姿を消し、都市部で男性会社員が外出する際は背広、カンカン帽に革靴、商家の奉公人は和服、鳥打帽に雪駄か下駄という姿が一般的になる。

農村部や地方都市で名士は羽織に山高帽というのが、公式の場に出席する際の服装だった。ただし女性には、都市部でも農村部でも相変わらず丸髷、島田に和服という姿が一般的だった。

NHKが一九六六年四月から一年間、朝のテレビ小説と銘打って土曜と日曜を除く毎朝、十五分間放送した『おはなはん』は、そういう時代を生き抜いた女性の半生記を描いている。

榎山文枝演ずるところの『おはなはん』は、矢絣の和服に袴の姿で自転車に乗る。ちよつとはねつ返りなハイカラさんというのは、夏目漱石が『坊ちゃん』で描くところの『マドンナ』も、その一人といっている。

このころの世相を揶揄した風刺画「日本人の二重生活」が面白い。

描いたのは北沢楽天という人であった。

「日本人の二重生活」が揶揄するのは、

・ 結婚式で新郎はモーニング、新婦は文金高島田。神前で式をあげ披露宴はホテルで洋食。

・ 小学校ではローマ字を教えながら、子供たちは難しい仮名遣いを覚えなければならない。

・ 来客を畳の間に置いた椅子に据わらせ内儀が畳に三つ指を付けて迎える。

・ 女学生は矢絣の和服の上にスカートをはき、髪を丸髷風に結び上げて足元はブーツ。

・ 宴会は背広姿で座布団に座り、前に置かれた膳で食する。

等々である。

外出のときは洋服だが、帰宅すると和服に着替えるというのが、この時代の勤め人の一般的な生活スタイルだった。和洋折衷が日常の生活に浸透したのは大正に入って——西暦一九一〇年代以後——である。東京や大阪の急速な都市化が、新しい文化のかたちを生み出したといっている。

一九一四年、東京の銀座に三越百貨店の新館がオープンした。そのビルの模型を手にした赤坂の芸妓・万龍を描いたポスターが

「今日は帝劇、明日は三越」

というキャッチコピーを生み出した。

ややのちの統計だが、銀座の町を歩く女性の服装、髪形などを調べた記録が残っている。青森県生まれの建築学者、風俗研究家である今和次郎が一九二五年に行ったもので、東京美術学校を出た建築の専門家でありながら、新渡部稲造、柳田國男と交友し、各地の風俗を見て歩くのが趣味だったこの人物らしい足跡である。

もっとも彼は各地の風俗を見るだけでなく、農村の家屋の造りや小川の配置から農業社会を考え、女性の装いから都市の構造を思考した。つまり社会学者、民俗学者、考現学者でもあった。

それによると、和服姿は男性が三三％であったのに対し、女性はわずかに一％に過ぎなかった。また往来する女性八百十六人のうち、髪型が洋風だったのは三百四十四人で四二・一％だった。ということは、丸髷や島田、銀杏透し、束髪など和風の髪型に洋装という女性が半数以上だったことを示している。女性のファッションもまた、和洋折衷であった。

一九二二年（大正十一）の秋、東京で平和記念東京博覧会が開催された。そのとき建築学会の手で初めてモデル住宅というものが作られた。こんにちの住宅展示場の原型をなすものであって、庶民にとって縁遠い存在だった洋風の生活スタイルが、手を伸ばせば届くところに近づいた。

建坪は二十坪以下、坪単価は二百円以内、居間・客間・食堂は椅子とテーブル、台所にはシステム・キッチンというのが耳目を集めた。

同じ年、早稲田大学教授の山本忠興は、東京・目白に七百坪の土地を買い求め、水道以外すべてを電気でまかなう実験的な住宅「電気の家」を建設した。設計は従兄弟で住宅設計家の先駆をなした山本拙郎であった。

玄関のドアも電気で開閉し、湯沸かし器、フットウォーマー、電気掃除機、パコーレーター、トースター、電気アイロン、電気ミシン、電気オーブン、電気洗濯機、扇風機、電気ストーブなど、すべてアメリカのウエスチングハウス社から輸入した家電製品が揃えられた。

電気オーブンだけで六百五十円もした。電化製品の合計額は庶民の家が一軒や二軒は建つ金額であったと伝えられる。

外見は洋館であり、中に入っても床は板張り、椅子とテーブルの生活というのが前提だったが、であるにもかかわらず、電気座布団が用意され、台所には竈（かまど）が設置され、部屋には畳が詰め敷かれたというのが、いかにも和洋折衷である。

~~~~~  
補 注  
~~~~~

国立歴史民俗博物館 歴博・千葉県佐倉市城内町一七。大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一組織として一九八三年に設立された。同博物館のホームページによると、事業は①研究②情報提供③一般公衆に対する教育④資料の収集・制作・保管⑤大学院教育等への協力⑥国際交流が挙げられている。

このうち研究活動では「日本の歴史及び文化を実証的に解明することを目標とし、歴史・考古・民俗資料を系統的に収集・整備し、これらの資料に基づき、歴史・考古・民俗及び情報資料の各研究系が相互に連携、協力しつつ、関係分野の研究を推進すると共に、全国の大学等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通研究課題のもとにプロジェクトを組織して、共同研究を行います」とある。

弥生時代の年代に関する発表 国立歴史民俗博物館二〇〇三年十二月発表資料「弥生時代の実年代」（二〇〇三年度の炭素年代の調査）藤尾慎一郎、「弥生時代の実年代」春成秀爾、「青銅器からみた弥生時代の実年代」宮本一夫、「世界のAMS研究の現状と課題」今村峯雄。

井上光貞 いのうえ・みつさだ／1917～1983。東京都に生まれ四二年東京帝国大学国史学科を出た。坂本太郎、和辻哲郎に師事し六一年東大助教授、六七年教授。七九年退官し文化庁を経て八一年国立歴史民俗博物館館長となった。津田左右吉の文献批判を継承し実証主義的考察をもって日本古代史論を展開した。弥生の編年 「弥生」の名は一八八四年に東京・弥生町（現東京

大学構内）から有坂鋁蔵が文様が簡素でふつくらした形状の壺を発掘したことによる。その文様が山形紋であったことから、当初は「忠臣蔵」の異称があった。一九一九年に濱田耕作が初めて「土器編年」の考え方を提唱し、これを受けて三三年に森本六爾が刊行した『日本原始農業』で総合的な編年の基盤が固まった。

有坂鋁蔵 ありさか・しょうぞう／1868～1941。一八八七年九月、東京帝国大学工科大学に入り海軍技術学生（造兵学科一期生）となり一八九〇年フランスに留学した。海軍工廠で技術畑を歩み、一九三五年海軍造兵中将で退役した。考古学に関心があり、一八八四年三月、東京・本郷の向ヶ丘弥生町で発見した素焼きの壺が、のちに「弥生式土器」と呼ばれるようになった。

水稻耕作 国立歴史民俗博物館も前記発表に際して当然反論が予想されたため、「当博物館研究チームは水稻耕作の開始をもって弥生時代の始まりと考えている」とコメントしている。

生活遺跡 住居や集落など人々の生活の痕跡を残す遺跡。毎日の暮らしに使った土器や竈跡、貯蔵食料などが出土するばかりでなく、居住空間の広さから家族構成員数、住居の位置から集落における地位や機能、共同作業のありようなどを推測することができる。このほか遺跡には埋葬地、祭祀場、工房、農地などがある。

縄文時代の米 縄文時代に稲作が行われていたことを示す例として、縄文式土器につく糊痕がある。またいくつかの遺跡から炭化した米が発見されている。最も古い時代に属するのは青森県八戸市の風張遺跡から出土した七粒の炭化米である。放射性炭素による年代測定の結果、紀元前八百年前後という数値が出た。農具や栽培跡などは発見されていないが、住居跡から出土したこと、のちの時代の遺物が混入した形跡がないことなどから、国の重要文

化財に指定されている。

津軽平野の水田遺跡 バイパスの建設に際して、一九八一・二年の両年にわたって青森県津軽地方の田舎館村垂柳で総面積三九六八平方メートル、計六百五十六枚の弥生時代の水田跡が発掘された（垂柳遺跡）。水田はさらに広域に広がっていると推測され、現在国指定史跡となっている。さらに一九八七年には弘前市砂沢で垂柳より三百年以上古い時代に属する水田跡が発見され、紀元前後ごろにこの地で広く水稻耕作が営まれていたことが確定した。また北緯四〇度以北の寒冷地に耐える品種改良が行われていたことも類推されている。

遺跡出土人骨の測定 金関丈夫『弥生時代人』（『日本の考古学』第三卷「弥生時代」収録・一九六六・河出書房新社）。

鹿鳴館 一八八三年、東京の梶町区内幸山下町に総工費十八万円で建設された「梶町」はのち「麹町」と表記。内幸山下町は元薩摩藩装束屋敷だった。レンガ造り二階建て・建坪四百十坪、イタリア・ルネッサンス風にイギリス風を融合した洋館だった。設計したのはイタリア人建築家のジョサイア・コンドル（Joaquim Conder／1852～1920）で、鹿鳴館のほか東京国立博物館（旧帝国博物館）、ニコライ堂、岩崎弥太郎邸などを手がけている。朝のテレビ小説『おはなはん』劇中、主人公の名は「浅尾はな」だった。モデルは林はな（原作者・林謙一の母）とされる。

マドンナ 小説『坊ちゃん』中では、「遠山」という苗字だけで名前は示されていない。松山在住の軍人の家の娘「遠田ステ」がモデルとされる。

北沢楽天 きたざわ・らくてん／1876～1955。本名「保次」。埼玉県に生まれ、福沢諭吉が主宰した時事新報に風刺漫画を

掲載した。一枚の絵で「おかしみ」を表現し、社会的な意味を持たせた功績は大きい。

今和次郎 こん・わじろう／1888～1973。青森県弘前市に生まれた。早稲田大学建築学科教授、日本建築士会会長、日本ユニホームセンター会長などを務めた。関東大震災後の都市住宅や服装について幅広い調査研究を行った。

新渡戸稲造 にとべ・いなごう／1862～1933。盛岡藩奥御勘定奉行の家に生まれた。初名は「稲之助」と言った。一八七一年叔父・太田時敏（1839～1915）の養子となって東京に出たとき、名を「稲造」に改めた。一八八四年米ジョンズ・ホプキンス大学に留学し、帰国後は札幌農学校、京都帝国大学法科大学、東京帝国大学農科大学、拓殖大学、東京女子大学などの教授を歴任した。

柳田國男 やなぎだ・くにお／1875～1962。兵庫県で生まれ東京帝国大学法科大学政治科を出て農商務省に入った。東北の農村を調査研究するなかで民俗学に関心を持つようになり、『遠野物語』を著した。エスペ란antoの普及に努めたほか、一九四六年日本国憲法審議に参加した。

平和記念東京博覧会 東京府の主催で一九二二年三月十日から七月三十一日まで、上野公園で行われた。来場者は一百万人とされる。モデル住宅が建てられたのは「文化村」コーナーで、これが「文化住宅」の由来となった。

山本忠興 やまもと・ただおき／1881～1951。高知県に生まれ、東京帝国大学を卒業して東京芝浦電気に入り、のち早稲田大学に移って電気工学部の創設に尽力した。電気学会会長、照明学会会長を歴任し、学生連連会長も兼任した。これが縁で第九回

アムステルダム・オリンピックの日本選手団総監督も務めた。
山本拙郎 やまもと・せつろう／1890～1944。住宅設計
施工会社「あめりか屋」設計部の技師長を経て、創業者・橋口信
助の死後、経営を担った。

030 興廢在此一戰

第三十

興廃在此一戦

一

幕末以来の景色や文物に「西洋」の文物が混在する和洋混淆から、和洋折衷への動きが加速された事情を考えると、やはり日清、日露の二つの戦争を無視するわけにはいかない。例えばそれは、大宅壮一がのちに満州事変を野球に仮託して評論したことに準じれば、たぶんこういうことである。

小学校にはいったばかりの子どもたちが、とにもかくにも「野球」というものをやろうとチームを作った。「野球」というのは概ねこういうものだとか分っているのだが、練習をするにもルールが分からない。ボールもバットもミットもベースもなかったのだ、それぞれの家から思い思いに使えそうなものを持ってきた。

隣の町から、ちよつとは「野球」というものを知っている人に来てもらって、コーチをしてもらった。子どもたちは意外に物覚えが良かったので、どうにかこうにか格好が

ついできた。

数年たつと体も大きくなつたし、腕力、脚力もついてきた。みんなでアルバイトをしてバットやミットを買い揃えた。自前の球場もできたし、審判も養成した。

実力派草野球に毛が生えた程度のレベルに過ぎなかったが、周りの先輩たちが、「チーム」として認めてくれるようになった。この場合でいえば、差し当たり「大日本チーム」が古豪「清チーム」「露チーム」と一戦を交えることになった。

日清戦争（一八九四年）は、朝鮮半島の独立をめぐる清帝国と日本の対立が引き金になった。

歴史をたどれば、坂本龍馬が「日本は朝鮮国、中国などと連合して、大清帝国やヨーロッパ列強と対抗すべきである」と論じ、高杉晋作が上海にまで赴いて太平天国を指向したことにさかのぼる。

龍馬、晋作は朝鮮国の独立運動を、

——応援すべきである。

と論じたが、それは同じアジアの未開国としてともに連携し、西欧列強に対抗し支配から脱皮するという視点だった。ところが幕末維新の生き残りたちは、大日本帝国の領土拡張論にすり替えた。その第一は征韓論、第二は一八八五年の天津条約である。

西欧列強の圧力が強まるにつれて、朝鮮半島でも日本の幕末と同じように攘夷論が沸き起こった。当面の攻撃が開港協定と不平等条約を締結した李王朝に向けられたのも、攘夷論が倒幕論と結びついた日本における経過と等しい。ただ日本では幕府対朝廷の構図があつて、天皇という超法規的存在がある意味で緩衝役を果たした。李王朝にはそれがなかった。

ばかりでなく、李王朝は軍兵を持っていなかった。宮殿に控えていたのは門を守る衛兵と儀式を彩どる儀仗兵ばかりで、その数は二千に満ちていなかった。そういうわけで国内に反乱が起こったとき、王朝の官僚は慌てふためき、これまでの習慣に従つて中国に泣きついた。

清帝国が朝鮮国を属国とみなしていたのは、「冊封」を前提とする中華思想において当然のことだったし、事実、朝鮮の李王朝も中国中華思想の中で安穩を得ていた。

これに対して日本帝国が

——朝鮮国の自主・中立性を認め、独立を認めよ。

と清帝国に迫ったのは、すでにして朝鮮国への内政干渉にはかならなかつた。東学党の乱に際して李王朝が清帝国に援軍を求め、それを阻止せんとして日本帝国が陸戦兵一個旅団を仁川に上陸させたのが日清戦争の始まりとなつたのだが、当の東学軍は

——斥倭洋倡義。

の旗を掲げていた。彼らの目に日本は「洋」と同じように祖国を侵略しようとしている敵に見えていた。

海戦は一八九四年（明治二十七年）の九月十五日、午後零時五十分から始まつた。戦史上、日本では「黄海海戦」、中国では「仁川沖海戦」と呼ぶ。これで勝敗の趨勢が決まつた。

清朝の海軍は当時、アジア最大の戦艦「定遠」「鎮遠」を中核に、計十二隻で日本海軍と対峙した。日本海軍の主力は戦艦「吉野」「松島」「橋立」など隻数では同じだが、「定遠」「鎮遠」に匹敵する砲艦がなかった。清朝海軍が誇る二隻の戦艦に搭載されていた三十七センチ砲が火を吹けば、日本海軍の「松島」「橋立」ですらたちまち撃沈することを免れ得なかつた。

それが勝つた。

子どもの草野球チームが、商店街の大人のチームに勝つたようなものである。

これが自信を植え付けた。

二

日露戦争（一九〇四）もまた、海戦が勝敗を決めた。

こればかりは誰が見ても日本の負けだった。何せ相手は実業団のチームだから、遠征で疲労が癒えていないとはいえず、子どもの草野球では敵うはずがなかった。双方の海戦兵力を見ると、そのことがよく分かる。

ロシアの第二太平洋艦隊（いわゆるバルチック艦隊）は計三十八隻である。うち最大は一万三千五百トンの戦艦三隻、さらに一万トンの戦艦が五隻。砲力は十二インチ砲二十六門、十インチ砲七門、九インチ砲および八インチ砲二十五門、六インチ砲百五十九門。

対する日本艦隊は一万五千トン級戦艦三隻が中核だが、艦船数は二十八、砲力は十二インチ砲十二門、十インチ砲一門、八インチ砲三十四門、六インチ砲二百四門。

砲力においてロシア艦隊が勝り、かつ戦闘経験では圧倒的な優位にある。

——ロシア艦隊の勝利は動かない。
とするのが国際的な見かただった。

このために日本帝国陸軍は、ロシア艦隊が到着する前に何が何でも旅順港を制圧しようとし、乃木希典をして無慮な攻撃を繰り返した。日清戦争のとき、乃木が率いた軍団は一日にして旅順を攻略したが、それから十年が経っている。

その間にロシア軍は大量のコンクリートを打ち、壕を掘

り、そこに大砲と機関銃を持ち込んで、東洋一の要塞を造り上げていた。しかも山の本を伐り倒し、攻撃してくる兵に身を隠す場所を与えない工夫を施した。

帝国陸軍がそのことを知らなかったわけではなかった。しかしどれほどの装備であるかまでは計り知れなかった。このために悲劇的な戦闘が繰り返された。

突撃する日本の兵士は屍を越えてさらに突撃して斃れていった。元込めの旧式銃と機関銃では勝負にならなかった。あまつさえロシア軍は要塞の周りに二重三重の鉄条網を張り巡らし、そこに高圧電流を流してもいた。

——港が見える。

という報告がもたらされた。

軍略地図上に「二〇三」と符号が打たれた小高い山の頂から、はるか遠方に旅順港が望まれた。出入りするロシア旅順艦隊の姿も目視できる。

——ここから港を砲撃してはどうか。

要塞の頭越しに、ロシアの艦船に砲弾を落とすのである。結果として、これが陸戦の趨勢を決めた。旅順港のロシア艦隊はほぼ全滅し、黒海から遠来のバルチック主力は帝国海軍を撃滅しなければ疲れを癒す寄港地がなくなった。これを得るために帝国陸軍が失った兵士は三万を越えた。

三

バルチック艦隊にとつて旅順艦隊の全滅や遼東半島におけるクロボトキン軍の敗退は、なるほど暗雲に違いなかった。しかし艦隊を率いる中將ロジェストヴエンスキーは

——艦隊決戦では、勝つ。

と信じて疑わなかった。黒海を出てから六か月にも及ぶ無寄港遠征に兵は疲れていたが、士気は盛んだつたし、三十八隻もの艦船が従っているのである。

一九〇四年五月二十七日午後一時五十五分から始まつた艦隊決戦では、日本艦隊がとつた敵前回頭という離れ業が功を奏した。真正面から進んでくるバルチック艦隊に、腹を見せたのだ。

ロシア艦隊は艦首の砲しか使えないが、日本艦隊は側面の全砲塔から轟音を発することができ、その代わり敵の砲弾を受ける確率も高くなる。

当時の世界の戦術からすると非常識極まりないことだった。

——一か八か。
であつた。

連合艦隊司令長官・東郷平八郎が乙旗を掲げ、全艦船に

向けて

——皇国の興廢この一戦にあり。

と訓令したのは有名な話だが、つまるところこの戦いに勝たなければ後がない、という切羽詰つた決意表明でもあつた。出撃を知らせる電文にあつた「天気晴朗なれど浪高し」のところが、東郷の本心に近かつたのであるまいか。

海戦は翌日も続き、ロシア艦隊は戦艦六、巡洋艦四、海防艦一、駆逐艦四、特務艦四を撃沈され、白旗を掲げた。

日本はますます自信を持つた。

——オレは存外に強い。

と素直に思つた。

新興国として、それはそれで当然であつたろう。日本人が「日本」というものに自信を持つたとき、表立つてではないにしても「西洋」への反動が起こつた。それが世相において、和洋折衷を促した。

筆者は、和洋折衷を揶揄しているのでなく、「西洋」というものがどういふかたちで日本の社会に浸透していったのかを眺めている。ここでの「西洋」とは、都市化であり、消費経済であり、脱亜細亜であり、煎じ詰めれば「新しきを援け古きを挫く」という考え方であつた。

これを思想・精神でとらえれば、一つは自由主義であり、

また一つは資本主義であり、なおかつ軍事力と経済力が一体となったところに政治があるという帝国主義と言い換えることができる。明治初年において、それは一部の特権階級ないし、知識階級の独占物だった。

彼らは不平等条約の改正と富国強兵を旗印に「西洋」を模造した。東京のど真ん中に出現した鹿鳴館は、まさにテーパークのような滑稽なものでもあった。

大日本帝国憲法と同期するように、「西洋」は物珍しいものではなくなった。田舎のちよつとした名家の子女は革靴をはき、西洋風の日傘をさし、人力車（これまた和洋折衷の典型だが）に乗った。商人や農夫は荷車の代りに鉄パイプの枠とゴムタイヤをはいたりヤカーを曳き、商家の奉公人は和服に烏打帽で都会の町を駆けた。

「コロッケ」という和洋折衷の食べ物が登場し、トンカツやカツ丼が発明された。ボート遊びや海水浴といったレジャーが開発され、修学旅行や社員旅行というものが始まった。カフェーやバーでは割烹着姿の女給が働き、子どもたちは駄菓子屋の店先にあるパチンコで遊んだ。

以下は雑学だが、パチンコという遊具は一九二〇年にアメリカで考案された「ガルバルデイ」という名のゲーム機だった。サーカスや興業団が町々に運び、見物人から小金を稼いだのである。日本でいえば、温泉地にある射的場の

ようなものであろう。

これが日本に上陸して「コリントゲーム」という名前で輸入されるやたちまち普及し、「玉遊菓子自動販売機」として百貨店の屋上などに設置された。現今の大人を相手にしたパチンコ店の第一号は一九三〇年に愛知県に出来たのが最初とされている。

パーマ、劇場、レビュー、ダンスホール、活動写真、週刊誌、地下鉄、電気ブラン、竹久夢二、安田講堂、帝国ホテル、宝塚少女歌劇、チンドン屋、あんばん、大正琴……という中の一に、計算機も入っていた。矢頭亮一、逸見治郎、川口市太郎、大本寅治郎もまた、そういう時代を生きていた。

補注

太平天国 中国の清朝末期、宗教結社「上帝会」の指導者である洪秀全（一八一四～一八四一、本名「仁坤」）が貧困階層の支持を得て一八五一年に建国した。南京を都として版図は華中・華南にわたり、共産的軍事組織を基盤として一八六四年まで存続した。

国号は「太平天国」が一般的だが、「真命太平天国」「天父天兄天王太平天国」とも称した。孔子の教えとキリスト経を混交した新興宗教教団であって、「天国」はキリスト教に由来している。

征韓論 一八七三年（明治六）、西郷隆盛、後藤新平らが唱えた。国内に充満していた土族の不满をもって朝鮮国への開国圧力に転じようとしたが、国内の改革を優先すべきとする大久保利通らが強く反対した。この論争に敗れた西郷らは政府を去り、不平土族の決起に結びついた。最大の騒乱は一八七七年二月十五日に始まった西南の役（同年九月二十四日）だが、西郷隆盛が明確な外交方針を持って決起したわけではなかった。

天津条約 十九世紀の天津は清帝国の外交窓口であったため、前後十七件の国際条約が同地で締結されている。史上最も著名なのは一八五八年に英仏露米四か国との間に結ばれた条約であって、これによって清帝国は①キリスト教の布教の自由②列強四か国の使節団の北京駐在③四か国人の国内往來の自由④開港・公益場所の拡大——などを約束した。

日本と清帝国が最初に結んだ天津条約は一八七一年の「日清修好通商関係条約」次いで一八八五年に伊藤博文と李鴻章の会談で交わされた朝鮮国への干渉協定がある。

東学 一八六〇年に崔濟愚（チェ・ジェウ／1824～1864）が創始した新興宗教で、儒教、仏教、道教を基礎に「万民平等の太平天国を具現する」とした。キリスト教（西学）に対して「東学」と称した。教義は迷信的だったが、民衆に広く支持を得て反体制運動に発展した。危機感を覚えた李王朝は一八六三年に崔濟愚を「惑世誣民」の罪で処刑し沈静を図った。しかしそれが逆効果となって二代教主・崔時亨（チェ・シヒョン／1827～1898）のとき、ついに反乱（一八九四年、東学党の乱）となった。

斥倭洋倡義 倭（日本）と洋（欧米列強）を斥け義を倡（とな）えよ。ここでのいう「義」は朝鮮国としての独自性ないし自尊意識を意味する。

ロジェストヴエンスキー Zinovii Petrovich Rozdestvenskii／1848～1909。ニコライ2世の侍従武官のち海軍参謀長、軍令部部長をへて太平洋第二艦隊司令長官となった。日本海海戦で重傷を負い捕虜となった。

Z旗 国際信号旗ではアルファベットの「Z」を表わし、一字信号では「引き船を求める」または漁船が用いる場合は「投網中」を意味するに過ぎない。アルファベットの最後の文字であることから、ロシア・バルチック艦隊との決戦し際して東郷は「背水の陣」の意味を付与した。以後、大日本帝国海軍ではZ旗がその意味でのみ掲げられるようになった。

031 電信

第三十一

電信

一

殖産興業の原点ともなった小栗忠順は、慶応四年閏四月六日、故なく上野・烏川水沼河原で斬首されてしまった。朝廷に恭順を示す徳川慶喜に抗戦を建議したことが薩長强硬派の恨みを買った。生きてあれば、明治維新の様相はいまひとつ違ったものになっていたかもしれない。

一方、最後まで叛旗を降ろさなかった榎本武揚はどうだったか。

大政奉還から五稜郭陥落まで、薩長の急進派、强硬派にとつてこの人物ほど「小癩な奴」はいない。

阿波沖で薩摩艦隊を砲撃し、幕府艦隊を率いて仙台、函館に逃れ、五稜郭に立て籠もって「蝦夷政府」の樹立を宣言した。ばかりでなく、維新政府軍一万を引きつけて七か月を戦い、彼我合わせて千三百人超の戦死者を出した。

小栗と同様、斬首・梟首に処されてもおかしくなかった。しかし黒田清隆、福沢諭吉らの嘆願で助命され、一八七

二年一月、特赦により辰の口牢獄から出獄した。同年三月放免隣、黒田清隆の尽力で開拓使四等官として出仕し、炭田の開発を試みた。次いで一八七四年から海軍中将と駐露公使を兼ね、サンクトペテルブルグにおいて千島・樺太交換条約を締結した。

一八七九年九月外務省二等官、同年十一月外務大輔、八〇年二月海軍卿、八二年五月皇居造営事務副総裁、同年八月駐清特命全権公使を経て、八五年の第一次伊藤博文内閣、八八年の黒田清隆内閣で通信大臣、八九年文部大臣、九一年五月の天津事件で外務大臣、九四年第二次伊藤内閣で農商務大臣を歴任した。

いや、榎本武揚のことを書くのは、貧乏旗本の出世物語のためではない。維新政府にとって大罪人であっても、その能力を評価して活かした明治元勲の度量を語るためでもない。数え三十九歳で中將となり、七十六歳のロシア帝国外務大臣アレクサンドル・ゴルチャコフと対等に領土問題を議論した豪胆さこともない。

話というのは榎本武揚がオランダ留学中に電信術を学び、フランス製のディエ電信機を二台持ち帰ったことである。郵政博物館によると、

一八六〇年ごろに製作された印字式モールス電信機で、イ

シクのついた円盤にテープを軽く押し付けるとテープ上に符号が印字される仕組みで、ゼンマイ駆動の時計仕掛けが使われています。

とある。

武揚がオランダに留学したのは文久二年九月から慶応三年三月までの四年半である。一八三六年の生まれだから、数えて二十八歳から三十二歳までということになる。この間、武揚はハーグで下宿生活を送り、第二次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争を観戦し、デンマーク、フランス、イギリスを巡行した。

本邦における電信は、一八五四年二月、再航した米合衆国海軍東インド艦隊のマシュー・ペリーが幕府に寄贈し、横浜で実演したのが最初とされている。サミュエル・モールズが「神のなせる術」というメッセージを送信することになった十年後のことだった。

また、文明開化の嚆矢として東京―横浜間で電信が始まったのは一八七〇年だから、武揚はそれよりはるか以前に電信の効用を理解した。もとより武揚は、軍事への適用を視野に入れていた。

以下に記すのは電信ケーブルの開通状況である。それは殖産興業と富国強兵の一環で行われたことであって、必ず

しも榎本武揚の業績ではない――のだが、駐露公使、海軍卿、通信大臣という経歴からすれば、一八七四年以後については浅からぬかわりがあったことは疑いを得ない。

一八七一年 長崎―上海

一八七二年 長崎―ウラジオストク

一八七三年 東京―横浜―長崎

一八七四年 東京―青森

一八七五年 津軽海峡

一八七九年 万国電信連合会議に加盟

一八八三年 呼子―釜山

一八八八年 電気学会が発足

一八八九年 明治丸が海底ケーブルを敷設

一八九一年 通信省電務局電気試験所が発足

一八九五年 海中ケーブル敷設船を英ロブニッツ社に発

注

一八九六年 海中ケーブル敷設船を「沖縄丸」と命名

一八九七年、鹿児島―基隆（台湾）

榎本が二台の電信機をロッテルダムから持ち帰って三十年、電信ネットワークはまず上海から長崎・シベリア経由で西欧諸国とつながり、次いで全国に張り巡らされ、さら

に本邦の權益拡大に連動して朝鮮、台湾をカバーした。

並行して電信技手の養成も行われた。東京・汐留と大阪・高麗橋に電機修技学校が設置され、一八七二年から一八八九年までに計一千四百八十五人が陸・海軍、鉄道および通信省などに配属されている。

榎本が電信を「我がこと」ととらえていたのは、一八八八年五月に電気学会を発足させ、自ら会長に就いたこと、および一八九一年に通信省電務局に電気試験所を設置したことに示されている。名譽職的な色合いが強かったにしても、電信が時代を変えると信じていたのに違いない。

二

電信について、紙幅を割く。

英語「Electrical telegraph」を「電信」と翻訳したのは福沢諭吉とされる。

現今のわれわれは

——電気通信の「電」と「信」を合わせたのだから。

と想像するぐらいだが、慶応二年に刊行した「西洋事情」初編の口絵に

蒸氣済人電気伝信

蒸氣人を濟け電気信の伝う

とある。

そこである「信」は「真」に通じ、真であればこそ「頼り」となる。

一八七四年の小学読本にも

伝信機は鉄線に機を設けて一瞬に信を万里に伝ふる器なり

とあって、当時でいえば「便り」、こんにちにあつては「情報」のことと言つていい。

初期の電信は、いわゆる「トンツー」「ツートン」の信号だった。「トンツー」「ツートン」の信号を解読して文字に変換した。つまり最初の電信は「電報」と呼ばれた。

一八七二年の当時、長崎からロンドンの電信料金は、欧文二十語の基本料金が二十六・五円だったという。「殖産興業」で触れたように、官営工場で働いていた熟練工の月給が十円から十五円だった時代である。

本邦初の電信ケーブルは、一八五四年、アメリカ東インド艦隊の技術者が東京・お台場に敷設した実演用の一・六キロ、実用に供されたケーブルは一八六九年の横浜弁天灯明台役所―横浜裁判所間約八百メートルである。同年、東

京―横浜間にも敷設されたが、国内より先に上海―長崎、長崎―ウラジオストックの海底ケーブルが敷設されたのは事情がある。

それというのは、当時、清帝国には攘夷ないし外資排斥の機運があつて、海底ケーブルの揚陸を許可しなかった。そこでデンマークのザ・グレート・ノーザン・テレグラフ社（大北電信・GNTC）が本邦を中継し、ウラジオストック経由で信号を送受信する通信路を設定した。

上海―ウラジオストックの電信路が日本を経由したのは、つまるところ日本列島が地勢的に都合のいい位置にあつたに過ぎない。しかし結果としてそれは国内産業の輸出入に重要な役割を果たした。外交においても同様だった。

ただし軍事となると事情が変わってくる。

GNTC社を現在に置き換えれば、私設インターネット事業者ということになるだろう。私企業であるかぎり通信網の維持管理に不安が出る。それと同じように、海外の民間企業に電信ケーブルの敷設と運用を任せておくことは、どう考えてもリスクではないか。実際、GNTC社はロシア帝国と連携して、グローバルな電信ケーブルのネットワークを構築する計画を持っていた。

一八九五年のこと、通信省はイギリスのロブニッツ社にケーブル敷設船を発注した。明治政府が自身の責任でケー

ブルを敷設・運営するのである。その背景には、第一は旧幕府がGNTC社に与えた三十年のライセンス契約が切れること、第二は日清戦争で獲得した租借権と台湾島の割譲があつた。西欧列強の一角に割って入るには、情報を密に共有しなければならぬ。

ロブニッツ社に発注したケーブル敷設船は一八九六年二月に進水し、「沖縄丸」と名付けられた。全長八十八・六メートル、型幅（内径）十二メートル、総トン数二千二百七十八・四二トン、航海速力十二・四五ノット（時速約二十三キロ）。その名は沖縄県に由来するという説と、「沖に縄を張る」の意味とする説がある。

沖縄丸は同年六月二十七日に長崎港へ到着し、通信省の船ながら陸軍省の臨時台湾電信建設部の配備となった。最初の仕事は鹿児島県肝属郡大浜から奄美諸島、琉球諸島を経由して台湾の台北市淡水までケーブルを敷設することだった。全長千四百五海里（千九百三十五キロ）である。工事は八六年八月に始まり、翌年五月に終了した。

このあと通信省は民間の輸送船「伊吹丸」「奉天丸」「第三辰丸」を改装してケーブル敷設力を強化した。一八九一年のシベリア鉄道着工を、明治政府はロシア帝国のアジア地域における南進政策と受け止めた、さらに日清戦争後の三国干渉で、ロシアは旅順口の租借権を獲得した。ウラジ

オストックに続く不凍港をロシアは手に入れたことになる。旅順口はロシア海軍太平洋艦隊の根拠地となり、町全体が要塞化されていた。山の傾斜地を削って岩とコンクリートで固め、堀の外に高圧電流が流れる鉄条網、地下に迷路のような長い連絡通路を張り巡らした。なかでも東鶏冠山北堡壘は総面積が九千九百平米もある大規模な要塞だった。

明治政府は朝鮮半島における利権が脅かされると考え、ロシアは満洲および関東州の租借権・鉄道敷設権などを確保するねらいがあった。大韓帝国がロシアに咸鏡北道の鉾山採掘権や森林伐採権を与えたことが、明治政府の危機感を増長させた。

——戦争になるかもしれない。

明治政府の軍部がそのような想定をしたことは疑いを得ない。電信ケーブルの敷設力が強化され、秘匿化されたのはそのような事情によっている。

三

一九〇四年二月に日露間で戦端が開かれた。

日本陸軍先遣部隊である第十二師団の木越旅団が仁川に上陸したのは二月八日だった。日本政府がロシア政府に宣

戦を布告したのは二月十日だった。ロシア政府がハーグ陸戦条約にある

「武力行使の前に第三国による調停を依頼する努力」を日本が怠った、と非難したのは当然だった。以後、戦況は日本優位のうちに展開した。

一九〇四年

・八月十日・黄海海戦（ロシア太平洋艦隊敗北）

一九〇五年

一月二日・旅順開城（ロシア軍旅順要塞司令官ステッセ

ル中将降伏）

三月一日・奉天会戦（ロシア陸軍司令官クロパトキン大將撤退）

五月二十七日・日本海海戦（ロシア海軍バルチック艦隊壊滅）

という経過をたどる。

開戦前の交渉で明治政府はロシアに「満韓交換」を、ロシアが北緯三十九度線分割案をそれぞれ提示した。交換や分割の対象となった清帝国、大韓帝国が蚊帳の外に置かれているのは、軍事的優位性が帝国の版図拡大を担保するという植民地主義であって、民族優生論・選民思想と同期・

一体の關係にあつた。ポーツマス条約は日本が外形的な名乗りではなく、心身ともに「大日本帝国」に變つてゆく發射台となつた。

話を戻すと、一九〇三年の末、沖繩丸に朝鮮半島の木浦（八口浦）―佐世保、馬山浦（鎮海湾）―對馬への電信ケーブル敷設の命令が下された。主導したのは兒玉源太郎である。

彼は臨時台灣電信建設部で部長を務め、台灣總督・内務大臣を経て日露戦争で陸軍滿州軍総參謀長となつていた。兒玉もまた電信の軍事的効用を理解していた。明治政府は八口浦や鎮海湾を日本海軍の艦隊根拠地にすることを予定していたためである。

この作業の通じて、沖繩丸は佐世保の海軍工廠でマストの位置を変え、船体の色を白から黒に塗り替えるなどの偽装改造を施された。さらにのち再び白色に塗り替えられ、船名を「富士丸」と改めたのも偽装だった。ケーブル敷設だけでなく、ロシア側のケーブルを遮断・回収する仕事もした。

新しい技術として、一九〇〇年代初期には無線通信が実用化されている。先駆となつたのは、一八九六年に五百メートルの空間で情報の送受信に成功したグリエルモ・マル

コーニである。その成功に米英の海軍が飛びついた。すべの艦船に通信機を搭載すれば、海上でも情報を交信することができる。

マルコーニの成功を知つて、英国公使だった加藤高明が軍艦に装備することを構想した。たまたま六六艦隊計画に基づいて発注された戦艦四隻がロンドンのテムズ鉄工造船所で建造中だった。その四隻に搭載する交渉をマルコーニ社が行っていたが、埒があかなかつた。

そこで加藤は一八九九年に交渉を打ち切つて、海軍に無線電信を研究するよう指示を出した。

海軍は一九〇二年、三十四キロの空間での信号送受信に成功した。これとは別に通信省の電気試験所も研究に着手していて、一八九七年のこと、東京・芝の金杉橋と東京湾上の船舶、直線距離で約三キロの無線通信に成功した。ちなみに海軍が開発した無線通信機は一九〇三年から安中製作所が量産し、海軍はこれを「三六式無線電信機」として採用した。

海軍はまた、一九八四年の「海岸望楼条例」に基づいて、列島の沿岸に二百以上の望楼を設置した。通過する艦船との通信、気象の観測、海難報告などが主な目的だったが、ロシア帝国を仮想敵とするようになった一八九六年以後、玄界灘や五島列島、済州島などの望楼には無線機を配置し

た。海底ケーブルを引き込んで有線・無線の機能を備えた望楼もあった。

日本海海戦のとき第一艦隊参謀として活躍した海軍大尉・秋山真之は、英国駐在中に清帝国、大韓帝国に無線局の用地租借を要望したが実現しなかった。そこで海軍は無線装置を実装した艦船を港湾に接岸させ、望楼の通信機能と連携させたのである。

四

さて、日本海海戦である。

バルチック艦隊（バルト海艦隊）は司令長官ロジェストヴェンスキー中将麾下、戦艦八、海防戦艦三、装甲巡洋艦三、巡洋艦六、その他三十八。ラトビアのリエパー港からマガダスカル島のノ・シベ港、インドシナのカムラン湾を経ての長駆である。

図体は大きいが第二艦隊と第二艦隊の混成で、指揮命令系統が一本化できていなかった。戦隊の航行速度にも大きな差があった。加えて石炭や弾薬の過積載でスエズ運河を通過できないのすったもんだがあった。挙句、インド洋に入った直後に旅順陥落の知らせが入った。

旅順口の第一太平洋艦隊は前年八月の黄海海戦で機能不

全に陥っており、陸と海から日本軍を挟撃する構想はすでに崩れていた。真つ直ぐウラジオストックに入り、そこを拠点に日本を攻撃する作戦しか残されていなかった。

このときロジェストヴェンスキー中将が案じていたのは、無線電波が自分たちの位置を知らせることになることだった。実際、日本軍は総力を挙げてロシア艦隊の居場所を探索していた。東シナ海を抜け、黄海に入ると日本軍の通信が活発になった。それを傍受した五月十六日、中将は全艦船に通信封止を命令した。

五月二十七日午前四時四十七分、

敵艦隊ノ煤煙ラシキモノ見ユ

の報が入った。

それは日本郵船の仮装巡洋艦「信濃丸」が発信し、その十キロ近傍にいた巡洋艦「和泉」が受信、対馬島神山の望楼が取り次いだ。

これを受けて連合艦隊は

敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ

聯合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス

本日天気晴朗ナレドモ浪高シ

と打電した。

「午前六時ごろ」とされるのは戦艦「三笠」から大本営に無線で直接でなく、手交を重ね、海中・陸上の専用ケーブルで東京に送られたためであるらしい。連合艦隊もまた自分たちの位置を知られなくなかったのだが、ロシア艦隊とは情報の扱いに違いがあった。軍事関係者にあつては、その違いが勝敗を分けた一因と分析する向きもある。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

榎本が持ち帰った電信機 榎本はアムステルダムから持ち帰った電信機を箱館まで持って行き、函館港の関税倉庫に預けていた。政府軍との戦いで忘れ去られ、そのまま所在が分からなくなっていた。

一八八一年、明工舎の沖牙太郎が東京・愛宕山の古道具屋の店頭に並んでいるのを見つけて購入した。一八九一年の第三回電気学会講演会で通信省の技官・吉田正秀が紹介し、会長だった榎本が確認、再会することとなった。この電信機は現在、郵政博物館に収蔵されている。

電信修技学校 入学試験(筆蹟・論書・英語またはフランス語)を経て電信技術のほか数学、電機学が習得科目だった。電信技手になると、その妻に「電信助手」の月給五〇十円が支給されるほど高待遇だった。一八八七年「東京郵便電信学校」、一九〇五年「通信官吏練習所」となった。

沖縄県 一八七二年、琉球藩が設置され、琉球国王の尚泰を「琉球藩王」に封じて東京に藩邸を置いた。一八七九年三月、明治政府は琉球藩を廃して沖縄県を設置、尚泰は東京の藩邸に居を移し華族となった。

臨時台湾電信建設部 一八九五年六月二十四日公布の官制で陸軍大臣の監督下に設置された。電信ケーブルの敷設と並行して、臨時台湾燈標建設部による灯台の整備が行われ、これによって鹿児島―台北の航路が確保された。部長は児玉源太郎少将だった。技師として大井才太郎、浅野応輔、青木大三郎、梶浦重蔵、岡本桂

次郎、河合幾次、西方七郎の名が残っている。

児玉源太郎 こだま・げんたろう／1852～1906。

台湾総督、第一次桂太郎内閣で内務大臣、文部大臣などを経て日露戦争で満洲軍総参謀長と務めた。最終階級は陸軍大将。

グリエルモ・マルコーニ Guglielmo Marconi／1874～1937。イタリアのローマで生まれ、早くから数学と物理学を学んだ。一九〇九年、無線通信の発展に貢献したとして、ブラウン管を発明したフェルディナント・ブラウン (Karl Ferdinand Braun／1850～) とともにノーベル物理学賞を受賞した。

マルコーニ社 一八九七年に設立され二〇〇六年ゼネラル・エレクトロニクス(GE)社に吸収された。邦訳では「マルコーニ無線電信会社」とも。

旅順口 現在の大連市旅順口区。清帝国の北洋艦隊が本拠港としたことから町が発展し、日清戦争では日本の陸軍が占拠した。下関講和条約で大連を含む遼東半島は日本に割譲されることに決まったが、仏・独・露の三国干渉で旅順はロシア帝国の租借地となり、ロシア太平洋艦隊の基地となった。

大韓帝国 一八九七年から一九一〇年まで李氏朝鮮が用いた。日清戦争の下関条約で、李氏朝鮮国と清帝国との宗属関係が消滅したことに伴い、第二十六代高宗が皇帝に即位し、国号を改めた。

六六艦隊計画 一八九六年から一九〇五年に策定された海軍軍備拡張計画。二期で構成され、このとき戦艦「敷島」「朝日」「初瀬」「三笠」がテムズ鉄工造船所で建造されていた。

電気試験所の無線通信機 一八九六年、マルコーニの公開実験の記事を読んだ石橋純彦(いしばし・あやひこ／1853～1932)が通信省電気試験所長の浅野応輔(あさの・おうすけ／18

59(1940)に無線の話をし、浅野が電信主任の松代松之助(まつしろ・まつ)のすけ/1866(1948)に研究を命じた。松代は少ない文献をもとに送信機などを作成した。

松代は明治三十年十二月、東京の築地海岸に送信機を設置し、東京湾沖一・八キロに浮かべた小船の受信機との通信に成功した。次いで明治三十一年十二月、月島と第五台場間三・三キロの双方向の通信実験に成功した。

秋山眞之 あきやま・まさゆき/1868(1918)。日本海海戦における出撃の報告電報「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」の作者。兄・好古(よしふる・1859(1930))とともに小説『坂の上の雲』の主人公でもある。

バルチック艦隊の損害 沈没二十一、拿捕六、抑留六、戦死者五千八、捕虜六千六百六人だった。捕虜の中には総司令官ロジェストヴェンスキー中將も含まれていた。

信濃丸 日本郵船のシアトル航路用貨客船として一九〇〇年四月イギリスグラスゴウのデビット・ウィリアム・ヘンダーソン社で竣工した。日露戦争のときは海軍に徴用され、軽装備を施され海上を航行する船舶を護衛する任務に就いていた。

巡洋艦「和泉」 元はチリ海軍所属の巡洋艦「エスメラルダ」。これをCTR社のチャールズ・フリントが買い受けて日本に転売した。

出撃電 電文は符号化されていて、当事者にしか理解できなかった。電文二文字目が有意の文字で、それを符号表に照合して解読したとされている。電文は「アテヨ」(敵)「イカヌ」(艦隊)「ミユトノケイホウニセツシ」「ノレツ」(連合艦隊)「ヨハイ」(は)「タダチニ」「ヨシ」(出動)「ス」「コレヲ」「ワケフ」(撃沈)「ウ

メル」(滅)「セントス」の本文のあと、平文で「ホンジツテンキセロウナレドモナミタカシ」と続いていた。

連合艦隊 その構成は東郷希典乗座の旗艦「三笠」を含め戦艦四、装甲巡洋艦八、巡洋艦十五、砲艦・水雷艇・通報艦など百八隻で成っていた。日本海海戦における連合艦隊の沈没は水雷艇三のみで、死者は百十七人、負傷者は五百八十三人と記録されている。

032 大日本帝国

第三十二

大日本帝国

一

ここまでのおさらい。

『西洋』とのかかわりを軸に「明治」を区切ると、次のようになる。

- ・半舷上陸から鹿鳴館開館まで＝学習期
- ・鹿鳴館時代＝模倣期
- ・日清・日露戦争＝和洋折衷期

日清・日露戦争をきっかけに、日本は西洋の模倣から、和洋折衷の段階に入った。一九〇一年に矢頭亮一が「ヤズ・パテント・アリスモメートル」を、一九〇四年に川口市太郎が「川口式集計分類装置」を製作したのは、まさにその時期に当たっている。しからば日露戦争の次に置かれる節目とは何であるかといえ、やはり第一次大戦であろう。

では日露戦争から第一次大戦までの十年間はどうのように定義されるだろうか。

おそらくそれは

——『西洋』との擬似同化期。

とでもいうべき時期に当たっている。

東北アジアの片隅に位置する島国が自尊心を込めて、天皇＝皇帝を奉載しているがゆえに「帝国」を名乗っているうちはよかったが、戦争に勝つたびに版図を広げ、ついに本當の帝国をかたち作り始めた。

その帝国は『西洋』を範として学習するところから始まったために、『西洋』の模倣にならざるを得なかった。国の概観はイギリス風の立憲君主国家、軍制と経済はプロシア風の富国強兵という具合である。

これも「まことに不思議な話」の一つなのだが、この時期、『西洋』で著わされた洋書——経済論であれ小説であれ——の多くは、アメリカ合衆国で翻訳されて舶載されていた。ゆえに明治初期の日本が学んだ『西洋』とは、多分にアメリカナイズされているか、アメリカ人の解釈が入っていた。

徳川幕府二百五十年の鎖国に風穴を開けたのは星条旗を翻した黒船であった。鳥羽伏見に始まる戊辰戦争も、アメリカから舶載された大量の銃に依っていた。にもかかわら

ず、なぜか維新の志士たちは合衆国に憧憬しなかった。立憲君主国でありつつ大統領制に似た政治機構を模索することとはついになかった。

繰り言に近いが、筆者はそこで、一八六七年十一月十五日に、風神のごとく世を去った人物のことを思う。生きてあれば一九〇四年現在で七十歳になっていたはずの彼は、維新回天が実現した暁のことを尋ねられて

—— そうさな、海に乗り出して商売でもするか。

と語り、政治への迷惑を否定したが、そのような自由を時勢が許すとは考えていなかったであろう。

船中八策および新政府綱領八策のどこまでが彼の独創になるかという議論は措くとして、このとき彼が想定したのは土佐藩主・山内容堂を首班とする上下議會制であつて、そう遠くない将来にアメリカ合衆国大統領制に近い体制を指向したものだつた。ところがその意味を、明治の元勲たちは理解できなかった。

なるほど天皇を西洋の皇帝に位置づければ、立憲君主制の議會で国家を運営するのが順当に思われる。しかし雄藩が並立する産業革命の後進国であれば、道州連邦制への移行が模索されて然るべきであつたかもしれない。もしそうであれば、「西洋」に擬似的に同化した高圧的な、ないし植民地と同一視する朝鮮支配は回避できていたかもしれない。

い。

だが歴史に「もし」は存在しない。

二

日露戦争が勃発した一九〇四年の八月二十二日こそ、大日本帝国が擬似的西洋に転換したときだった。ロシア軍が要塞を築いていた旅順口をめぐる攻防に際して、大日本帝国政府は大韓帝国政府の局外中立声明を無視した。

朝鮮半島内に軍を進め、だけでなく駐留して圧力をかけ、併せて日韓議定書の締結を強要した。銃刀をちらつかせながら他人の家に土足で上がりこみ、その部屋を無償で貸与する契約を結ばせたに等しい。

これには前史がある。

一八七五年に朝鮮領海を侵犯した日本の軍艦「雲揚」である。長州藩がイギリスから購入した砲艦であつて、一八七一年、明治政府に帰属することになった。

この船が漢江河口の江華島砲台から射撃を受けたとき、それを口実に「日朝修好条約」の締結を迫った。日本の艦船および朝鮮半島における日本の資産、日本人の生命財産は朝鮮国の法規適用外に置くとともに、日朝間の取引きには関税を課さないというものだった。すでにして擬似的な

西洋同化が始まっていた。

日清戦争に勝利した第日本帝国は朝鮮半島から中国清王朝勢力を一掃して親日政権を擁立し、これに対して朝鮮独立派がロシアの力を背景に排日を図ろうとしたのが日露戦争の遠因である。つまり日露戦争に大日本帝国が勝利したとき、朝鮮の植民地化は規定の事実となった。

一九〇五年の八月、アメリカ合衆国ニューハンプシャー州ポーツマス島の米海軍工廠で日露講和条約が結ばれたとき、大日本帝国は南樺太の領有と満州東支鉄道、大韓帝国保護権を獲得した。この鉄道がやがて「南満州鉄道」（いわゆる「満鉄」）となり、日中戦争、第二次大戦における政治的・軍事的な戦略を担う。

余談がある。

ポーツマス条約が締結されたとき、日本の国内で講和反対の声が上がった。東京の日比谷で講和反対国民大会が開かれ、集まった民衆が暴徒化して新聞社や交番を襲った。

史上「日比谷焼打ち事件」と名付けられる。

九月六日から十一月二十九日まで二か月半にわたって東京市内に戒厳令が敷かれたというから、なまじの反対運動ではなかった。

この暴動には明確な指導者がいなかった。

政府は戦争の詳細な実情を秘匿し、勝利の部分だけを強

調する報道しかさせなかった。

民衆が

「勝った、勝った」

と浮かれ騒ぎ、提灯をかざして祝勝会を開いていたとき、実は旅順要塞に取り付いた乃木希典は死屍累々の苦戦を強いられていた。ともあれそのようなわけで、民衆は大勝利を信じていた。

八万人に及ぶ戦死者、四十四万人の戦傷病者を出し、戦費を贖うために米を節約し、外国から七億円もの借金をして勝ち取った勝利であれば、ロシアから賠償金を取って当然ではないか——という、素朴な怒りが爆発した。

もうひとつの余談は、ポーツマス条約締結後、アメリカ合衆国の鉄道王ハリマンが来日して桂首相に南満州鉄道の共同経営を提案した。南満州鉄道をシベリア鉄道につなげ、バルト海と結ぶ。そこからオリエント・エクスプレスを乗り継げばヨーロッパへの道が開ける。

——さらにアメリカ東海岸を結ぶ世界一周鉄道を作ろうではないか。

というのである。

この案に伊藤博文や井上馨は乗り気だった。ロシアは北満州に大軍を擁している。これをアメリカ合衆国の力で牽制する。桂はハリマンと共同経営の覚書を交わしたが、帰

国した小村寿太郎は血相を変えて反対した。

「一滴の血も流さなかったアメリカに、なぜ満鉄の權益を渡すか」

小村はすぐさま北京に飛び、日清条約に満州に第三国が資本投下することを阻止する条項を盛り込んだ。桂―ハリマン覚書は反故となり、これがきっかけとなつてカリフォルニアで日本人の排斥運動が活発になった。またアメリカ連邦政府が日本を仮想敵とする戦略構想「オレンジ計画」を策定する引き金になった。

話を日韓關係に戻すと、とまれポーツマス条約で大韓帝国の外交権が大日本帝国に移管することが決まつたが、それは帝国主義を是とする欧米列強諸国の了解を取り付けただけの話であつて、大韓帝国が承知したわけではなかつた。一九〇五年秋、枢密院議長伊藤博文は大韓帝国を訪問して韓国皇帝・高宗に

「我が政府、今や確定案として此の協約案を提出せるものなれば、寸毫も更改の余地なし」

と告げた。

さらに韓国駐留の日本陸軍司令官を伴つて韓国政府閣議に出席し、大臣一人ひとりに条約締結の賛否を質した。二人の大臣が

「絶対に否なり」

と答え、外部大臣は黙し、他の四大臣はしぶしぶ同意を示した。

果たしてこれが正当な二国間条約と認められるかどうか。この協約によつて大日本帝国政府は大韓帝国の外交権を篡奪し、あまつさえ内政にまで口をはさむ韓国総監府を漢城に置くことになった。

次いで一九〇七年六月、オランダのハーグで開催された国際平和會議に韓国皇帝高宗が特使を派遣して日韓協約の無効を訴えると、伊藤は皇帝の退位と軍隊の解体を断行した。このような横暴は現今とうてい許されることではあるまい。

三

このように書くと、大日本帝国は国際ルールを無視した非道外交をやつてのけたかに見える。

ところが實際はそうではなく、大日本帝国政府は国際ルールに則つて大韓帝国を支配下に置いたのである。といつてもそこでいう国際ルールとは、欧米列強諸国がお互いに闘ぎあいながら、相互にその利権を承認し合う帝国主義的互恵主義に基づいていて、支配を受ける側の理論は端から無視されていた。二十世紀に入つて列強が交わした条約の

多くは、それに類するものである。

・一九〇一年 ヘイ・ボンズフォート条約…イギリスがアメリカ合衆国に対し、中米で運河を建設・運営すること
を認める。(二九〇三年、アメリカ・パナマ共和国が運
河工事について調印)。

・一九〇四年 モロッコに関するフランス・スペイン協定。
・一九〇五年 カールスタッド協定…スウェーデンからノ
ルウェーを分離。

・一九〇六年 チベットに関する英清条約。

・一九〇七年 英露協商 ベルシア、アフガニスタン、チ
ベットの勢力範囲を決定。

このうち相互対等のもとで国境や支配権を取り決めたの
はカールスタッド協定だけでしかない。

カールスタッド協定というのは一八一三年にデンマーク
とスウェーデンの間で取り交わされたキール条約を破棄す
るもので、これによりノルウェーはスウェーデンとの連合を
解消して独立国家となった。それ以外はみな、条約・協定
を結んだ当該国以外の地域や国にかかわることである。

欧米列強が勝手に乗り込んできて、それぞれの言い分を
主張し、話し合いをするのだが、パナマ共和国、モロッコ、

チベット、ベルシア、アフガニスタンさらにはアフリカや
カリブ海の諸地域は、列強の話し合いに参加することが許
されていなかった。

自分が所有する庭に井戸を掘るかどうかを他人に決めら
れたのでは、憤懣やるかたないであろう。

大韓帝国の扱いについても同様だった。

一九〇五年の七月二十七日、アメリカ合衆国は陸軍長官
ウィリアム・タフトを「フィリピン視察」の名目で日本に
派遣し、桂太郎首相との間である合意を取り付けた。それ
は

・フィリピンをアメリカが統治することは日本にとっても
利益であり、日本はフィリピンに対していかなる侵略的
意図をもたない。

・極東の全般的平和の維持にとっては、日本、アメリカ、
イギリス三国政府の相互諒解を達成することが、最善で
あり、事実上唯一の手段である。

・アメリカは、日本が韓国に保護権を確立することが極東
の平和に直接に貢献すると認める。

というものだった。「桂・タフト協定」がそれである。

同年八月、今度はイギリスが日英同盟の見直しに際して

——貴国の大韓帝国を保護国とするのを容認する代わりに、わが国のインドにおける権益を保障してほしい。

と申し入れた。

対して大日本帝国政府は

——ロシアに対してはフランス、ドイツ、イタリアが好意的だが、貴国は同調されないように。

とタギを刺した。イギリスはこれを了解した。

こうしてアメリカがアジアに保有する唯一の植民地であるフィリピンは日本の人質になり、中国におけるイギリスの権益は日本の軍事力を背景に保障されることになった。

そのしているうち、アメリカ合衆国は「桂タフト協定」だけでは安心でなくなつた。三年後の一九〇八年、今度は國務長官エーリヒュ・ルートが駐米全權大使高平小五郎と協議を再開した。

このときアメリカ合衆国が示したのは、フィリピンだけでなくハワイにおけるアメリカの権益を日本に保障させることだった。「太平洋方面の現状維持に関する日米協定」がそれである。

このとき

——ハワイ。

という文字が大日本帝国海軍に記憶された。

むろん日本に否応はなかつた。なぜならアメリカ合衆国

政府はそれと引き換えに、満州における日本の権益を保全するといふのである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

大日本帝国 明治政府が正式に「大日本帝国」を使つたのは一八八九年二月十一日に発布された「大日本帝国憲法」においてだった。外交上の正式名称と定まつたのは一九三五年七月である。

大韓帝国 朝鮮李王朝は一八九五年、中国清王朝を宗主とする旧来型外交(中華帝国の藩屏・冊封国)から脱し「独立国」を宣言した。その二年後に新しい国号として「大韓帝国」を名乗った。

日露講和条約 日本全権小村寿太郎とロシア全権セルゲイ・ウイッテ(Sergei Yuljevich Witte/1849~1915)の間で調印が成され締結された。会議が開かれた地名を取って「ポーツマス条約」とも呼ばれる。仲介したのはアメリカ合衆国大統領セオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt Jr./1858~1919)だった。

南満州鉄道 日露戦争後、ポーツマス条約によって我が国が南満州鉄道株式会社を設立(明治四〇年)して経営した鉄道。大連・長春間の本線と幾つかの支線があった。鉄道経営のほか、炭鉱・港湾等の経営、或いは鉄道府属地の行政をも担当した。

日比谷焼打ち事件 東京市内の交番の七割が焼打ちや破壊にあり、死者十七人、負傷約二千人を出した。同様の事件が横浜や神戸でも起こった。

鉄道王ハリマン Edward Henry Harriman/1848~1909。ワイオミング州に産出する石炭を輸送するためユニオン・パシフィック鉄道を建設し、これを機に軍および連邦政府に接近した。のちカリフォルニア州で採れる野菜や果物を冷蔵して東海岸

に輸送する方法を編み出し、莫大な財を成した。ハリマンは投資銀行ブラウン・ブラザーズ・ハリマンを設立したのち国務長官に拔擢され、共和党政権を支えることになる。

小村寿太郎 こむら・じゅたろう/1855~1911。日向国(宮崎県)飢肥に生まれ、開成学校を出てハーバード大学に留学した。一八八〇年帰国し司法省に入り大審院判事。九三年外相・陸奥宗光に拔擢され清国公使館一等書記官、九四年日清戦争のとき政務局長、九五年駐朝鮮弁理公使、九六年外務次官、九八年駐米公使、一九〇〇年駐露公使、〇一年外相となり〇四年日露戦争に伴う一連の外交を一手に収めた。駐英大使ののち〇八年から再び外相に就任し日露協約、韓国併合などを手がけた。

日清条約 正式名称は「満州に関する日清条約批准の件並に附属協約」。満州におけるロシア資産を大日本帝国に移管するについて、その方法や移管後の措置などを清王朝と日本との間で取り決めた。オレンジ計画 一九〇四年からアメリカ連邦政府は総合戦略「カラープラン」の策定に入っていた。この戦略でイギリスは赤、ドイツは黒、メキシコは緑、日本はオレンジ色で示された。当時のアメリカ合衆国にとって最大の仮想敵はイギリス、ドイツだった。

高宗 コ・ジョン/1852~1919。一八六三年朝鮮王朝第二十六代国王に即位し、大韓帝国となった一八九七年、「高宗光武皇帝」を称した。

ウィリアム・タフト William Howard Taft/1857~1930。オハイオ州シンシナティ出身で七八年エール大学を卒業して陸軍に進んだ。フィリピン総督を経て一九〇四年陸軍長官に就任、〇九年第二十七代大統領となった。

高平小五郎 たかひら・こごろう/一八五四~一九二六。岩手県

一関の田崎家に生まれ。一関藩士・高平真藤の養子となった。開成学校卒業後、一八七三年工部省に出仕、七六年外務省に転じた。欧州各国の公使を歴任し、九九年外務次官、一九〇〇年アメリカ公使。ポーツマス講和会議に小村寿太郎とともに全権委員として出席した。○六年男爵、のち貴院議員に勅選され、○八年アメリカ大使となり、国務長官エーリヒ・リュートとの間に太平洋方面の現状維持と清国における機会均等主義を定めた。

## 033 火事場泥棒

第三十三

火事場泥棒

一

前節を書いていて筆者は、日中戦争が始まる前の時代を描いているような錯覚にとらわれた。朝鮮、満州、満鉄、フィリピン、ハワイ、仮想敵といった言葉が続くためであろうけれど、だが間違いなく時代は明治なのである。

そしてもう一つ間違いないことは、日中戦争とそれに続く太平洋戦争の遠因は日露戦争ないしポーツマス条約の後に、ひっそりと仕込まれていたということである。

ここで筆者はこの書籍の主旨に立ち返って、計算機の話に戻ることを欲するのだが、そのことを語るには一九一四年から十年間の出来事、すなわち第一次大戦の前後を見ておかねばならない。

一九一四年（大正三）の六月、ボスニアの州都・サラエボでセルビアの二人の民族主義者がオーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻を暗殺する事件が発生した。史上いうところの「サラエボ事件」である。その報復としてオーストリア・ハンガリー帝国がセルビアを支援していたロシアがオーストリア帝国とドイツ帝国に宣戦を布告、するとドイツ帝国はロシアと協調関係にあったフランスに対して宣戦を布告した。実力拮抗の国々が協商協定で手を組んでいたために、ドミノ倒しのように宣戦布告が連鎖した。

ストリア・ハンガリー帝国がセルビアに宣戦を布告し、オーストリア・ハンガリー帝国と協定を結んでいたドイツ帝国も八月に参戦した。

これに対してセルビアを支援していたロシアがオーストリア帝国とドイツ帝国に宣戦を布告、するとドイツ帝国はロシアと協調関係にあったフランスに対して宣戦を布告した。実力拮抗の国々が協商協定で手を組んでいたために、ドミノ倒しのように宣戦布告が連鎖した。

ドイツ帝国軍はベルギーを通過してフランスに侵入した。このときから戦争の主導権はドイツ帝国が握ることになった。

「フランスと戦うには、貴国を通過せざるを得ない」というドイツ帝国の言い分は、国際的に通用しなかった。

フランスばかりか、イギリスまでもがドイツ帝国に宣戦を布告し、またたくうちに戦火がヨーロッパ全土に広がった。騎虎の勢で進軍したドイツ帝国軍だったが、東からロシアの圧力を受けて進軍を停止した。

戦線が膠着し、両陣営は局地戦から陣地戦に移っていく。レマルクの小説『西部戦線異状なし』が描くのは、このときの事情である。

この戦争は従来の大砲と馬と兵隊による人海戦術の決戦方式から、毒ガスや戦車、飛行機といった新兵器に代表さ

れる科学・工業技術の物量戦に転換した。総合的な生産力が勝敗を決めるようになった。

日本政府はヨーロッパで始まったこの戦争を、千載一遇のチャンスととらえていた。中心となったのは、外相・加藤高明である。

彼には明確な見通しがなかったが、

「参戦すべきである」

直感的にそう考えた。

加藤がそう考えたのには、一応の理由があった。

日本は日露戦争の戦費を国債でまかなった。そのため、政府は二十五億円を超える巨額の国債未償還金を抱えていた。増税と外資の導入でからも表向きを取り繕っていたものの、金の保有高が底をつき、新たな市場を獲得しなければ経済が破綻するところに追い詰められていた。

一九一四年の八月四日、ドイツ帝国に宣戦を布告したイギリス政府に対して、加藤は駐英日本大使館を通じて、

「同盟国として対独宣戦を布告すべきか」

を質問した。

その回答は、

「イギリスは極東への戦火の拡大を希望しない」

というものだった。

ところが七日にいたって、イギリス政府から

「支那海におけるドイツ帝国の武装商船を、日本帝国海軍の力をもって撃滅してほしい」

という要請が届けられた。

ただちに加藤が首相・大隈重信に意見を具申すると、大隈はいった。

「あとのことはあとのことだ」

イギリスの要請があったことにしてドイツ帝国と戦争を始めておけば、あとはどうにでもなる、という意味だった。大隈と加藤の方針を聞いた元老の山県有朋は、

「武装商船だけに限ることはあるまい。青島を攻めるのが当然ではないか」

とぶち上げた。

「青島」は中国・山東半島の「チンタオ」のことである。青島はドイツ帝国の極東における本拠地だった。

参戦がこれで決まった。

## 二

山県有朋の意見は、軍略としては正しかった。

ところが、ただちに青島を攻撃することはできなかった。青島はドイツ帝国が中国政府から租借しているに過ぎず、中国の領土である。攻撃を行うには中国政府の了解を取ら

なければならぬ。

日本政府からの申し入れを受けて中国大總統・袁世凱はイギリスに

「日本の突出を抑制するよう、頼む」

と要請した。

それでイギリス政府は日本政府に対して

「行動は海上貿易の安全確保に専念されたい」

とする要望を發した。東洋の駄々っ子が火遊びをされてはたまらん、と言いたかったに違いない。

だが加藤は譲らなかつた。

日本が参戦するに当つては、イギリス、中国、日本の間で行きつ戻りつのやり取りがあつた。

結局、日本のゴリ押しが通つて、八月二十三日にドイツ帝国に宣戦を布告、九月二日に日本陸軍が山東省竜口に上陸を開始して山東半島を占領し、次いで十月十四日までに日本海軍が赤道以北のドイツ帝国領南洋諸島の占領を完了した。

対独宣戦は、その本拠地・青島を占領した時点で終結すべきであつた。

そもそも第一次大戦に参戦する正当な理由を日本は持つていなかったし、仮に日英同盟を根拠とする出兵であつたにせよ、山東半島からドイツ帝国の勢力を一掃するに当つ

ては、日英中の三国間で

「中国政府に還付する目的で」

という条件が合意されていたのである。

ところが日本軍はそのまま山東半島に居座り、同地最大の資産である山東鐵道を占有した。

——約束と違ふではないか。

袁世凱は、

「山東半島からの速やかな撤兵を望む」

という聲明を出した。

これに対して駐華公使・日置益が中国政府に手渡したのは二十一か条からなる要求だつた。二十一か条要求の骨子は、山東省と南滿州における日本の經濟的權益の確保にあつて、旅順・大連の租借期限を九十九年に延長するなど、一方的な内容だつた。

西欧列強が戦争に忙殺されている間に滿州における利權を確保・拡大しようと画策しようとする意図は明らかだつた。袁世凱はアメリカ政府が仲介してくれることに期待したが、アメリカ政府の関心はヨーロッパ戦線の成り行きにあつた。このため袁世凱は日本政府の強硬な姿勢に屈さざるを得なかつた。

五月二十五日、袁世凱は不承不承で日本政府との間で調印を取り交わしたが、これが中国における反日感情の遠因

となった。それだけでなく、日本は国際的に「火事場泥棒」の非難を受け、西欧列強が日本に対して猜疑心を抱くきっかけとなった。アメリカでは排日運動が起こっている。

だが、一般国民は

「勝った、勝った」

で沸きあがっていた。

日清、日露と、日本軍は向かうところ敵なしの勢いで、戦争に勝つたびに領土が広がっていった。この二つの戦争で日本は台湾を得、朝鮮を植民地とし、南満州に租借地を持った。

具体的にいえば、一八七五年（明治八）にロシア政府と千島・樺太交換条約を結んだとき、日本の領地面積は約三十八万平方キロメートルだった。それから三十年後の一九〇五年（明治三十八）には、二・三倍の八十八万平方キロメートルになっていた。維新からわずかに三十年で、大日本帝国が形成されたのだった。

ここでまた新しい戦争に勝ったことで、日本はドイツ帝国が領有していた南洋諸島をも統治することになり、また中国政府に突きつけた二十一か条要求で、山東半島の租借も可能になった。

戦後処理をめぐるベルサイユ講和会議に日本は戦勝国として出席したのみならず、イギリス、フランス、イタリア、

アメリカと並ぶ「五大強国」の一国に列したのである。ただしこのことが欧米列強諸国から嫉みを買ひ、中国、朝鮮の人民に恩讐を抱かせた。だけでなく、その版図を維持するのに、大日本帝国の実力は追いついていなかった。

### 三

産業界はこの戦争をどうとらえたか。

ヨーロッパ全土に戦火が広がったというニュースが流れたとき、まず株価が暴落した。次いで紡績業界に不況風が起った。

一九一四年九月二日、全国蚕糸同業者協議会が操業短縮を決定し、十四日には生糸相場が暴落した。大阪・北浜銀行が支払いを停止したことから大阪証券取引所と大阪米穀市場が休業し、次いで東海地方の銀行で取り付け騒ぎが発生した。

金融不安は全国に飛び火し、周陽銀行（山口県）、村上銀行（広島県）、五泉銀行（新潟県）が休業、八十五銀行（埼玉県）、昌平銀行（東京都）が支払停止、東海商業銀行（愛知県）が破綻した。政府は日銀を通じて総額二百五十万円の緊急融資を行うとともに、蚕糸業救済のために帝国蚕糸会社を設立して買い入れを保証しなければならな



った。また米価の低落を防止するために「米価調節令」を交付したが、大きな効果は得られなかった。

当初は戦争の経済効果に否定的だった産業界は、政府の金融緩和策を機にやや投資が回復し、加えてドイツの潜水艦による貨物船の運賃高騰や、アジア地域におけるイギリス製紡績製品の流通停滞などを背景に、じりじりと上昇に転じた。一九一五年十二月にいたってヨーロッパ戦線の膠着化がはつきりしたとき、株価が暴騰した。「大戦景気」が始まった。

このかつてない好景気に、多くの「成金」が誕生し、その中の何人かがのちの国内産業の基盤を形成していくことになる。そのことは後述する。

大戦景気は一九一八年いっぱいまで、丸三年継続した。この間に造船業、海運業が隆盛し、鉄工業が盛んになった。紡績業は空前の好況を迎え、製陶業、鋳工業、林業、商業が繁栄した。社会的な現象としては「サラリーマン」が誕生した。田園調布や軽井沢別荘地の形成、都市における消費経済の進展などもこの時期のものだった。

大本寅治郎が鉄工所の経営を近代化しようと思いつき、事務能率の向上のために計算機が必要と考え、あるいは舶来の事務機器が飛ぶように売れたのは、こうした都市型経済の発展によっていた。

一九一七年の十二月にロシアがドイツ帝国と単独講和を結んだとき、実業家や投資家の多くは、それはロシアの内政事情であるに過ぎないと考えた。

ロシア帝国では同年三月に革命が起きていた。ニコライⅡ世が退位し、さらに十月にはペトログラード武装蜂起の勝利でロシア帝国が斃れ「ソヴィエト」が誕生した。革命による政治的、経済的混乱を抱え、誕生したばかりのソヴィエト連邦政府はドイツとの戦争にかまけている余裕がなくなった。

しかし戦争はなお長期化する様相を呈していた。

六月にアメリカが参戦し、タイや中国も対独宣戦を布告していた。連合国軍の圧力は急速に強まっていた。いずれドイツ帝国とオーストリア帝国が降伏することは目に見えていた。だが、

——戦争が終わっても、ヨーロッパ諸国が復興するには相当の時間がかかるだろう。

と多くの人が考えた。

——民需品を中心に物資の不足が慢性化し、加えて復興のための新しい需要が発生する。

と予測された。政府も経済界も、戦後経済への危機感は薄かった。

実際のところというと、この予想は半分外れ、半分は当

つていた。

予想が外れた原因の一つは、「シベリア出兵」だった。寺内正毅内閣が一九一八年一月に実施した軍艦二隻のウラジオストック派遣がそれである。

名目は

「居留民の保護」

だったが、ロシアの混乱に乗じてシベリアに橋頭堡を確保し、満州の権益を拡大しようと企てたのは明らかだった。産業界はこの出兵を支持しなかった。対独宣戦布告と対華二十一か条要求で山東半島を獲得したとはいえ、新規の投資は同地にこそ集中すべきだった。ここに北部満州まで加えるには、経済・軍事の総合力から無理があった。さらに良識ある穏健な産業人は、国内で拡大しつつあった貧富の格差は正と物価の安定、工場就労者への待遇改善など「内治」を重視すべきだと考えていた。

一九一八年七月七日、ドイツが西部戦線で大敗した。

八月二日、連合国軍がアルハンゲリスクに上陸した。共産革命の崩壊をねらったイギリスやアメリカが一時的に占領したのである。

九月に入ってドイツ政府は連合国との講和に積極的な姿勢を示し、同月末にブルガリアが連合軍に単独降伏した。十月二十八日、ドイツ海軍で反乱が起き、これが引き金と

なつて翌十一月九日にドイツ帝国が瓦解した。戦争状態に全面的な終止符が打たれたのは十一月十一日である。

戦争終結のニュースが流れると、まず海運業が打撃を受けた。

一九一八年に大型船の賃借料は一トン当り四十七円だった。これが翌一九年の一月には二十九円に下落し、三月には十円にまで下がってしまった。海の航行に安全が保証されたのだから、当然といえば当然だった。福井や金沢などの和服問屋が過剰在庫を抱えて倒産し、三月には鉄、銅、綿製品などが暴落した。ここまでは「予想が外れたうち」である。

一九一九年四月を境に状況が一変した。

生糸や綿製品などの対米輸出が回復し始めたのだ。予想した通り、ヨーロッパ諸国はやはり簡単には復興しなかった。再び日本経済は上昇気流に乗り始めたが、大規模な戦争が終結したために工場の拡張計画は見直され、安定成長路線が選択されていく。

ただし、株式相場だけは違っていた。

余剰した資金が株式市場に流入し、有望株への投機が行われた。「戦後景気」と呼ばれる好況は、一九八〇年代末から九〇年代初頭に発生したバブル景気とよく似ている。実態としては、内部に労働運動や農村の貧困、輸入超過に

よる金保有高の減少といった問題をかかえていたにもかかわらず、株や不動産が高騰した。

投機に走ったのは投資家だけではなく。一般庶民でさえ、銀行から借りた金を投機に回し、実業が疎かになった。借金を集めて膨らんだ投機は、必ず破綻するのである。

~~~~~ 補注 ~~~~~

サラエボ事件 オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子（皇帝フランツ・ヨーゼフの弟カール・ルートヴィヒ大公の長子）フランツ・フェルディナント（Franz Ferdinand von Habsburg-Johann）
 1863～1914 は陸軍総監として陸軍の演習を視察するために、ショテク妃とサラエボを訪れた。サラエボ駅から市庁舎に向かった自動車に爆弾が投げられたが、ここでは従者三人と市民が負傷したにとどまった。歓迎式典を終えた皇太子夫妻は負傷した従者を見舞うために病院に向かい、その途中、ピストル二発が発射され夫妻は間もなく絶命した。

フェルディナント皇太子はオーストリア帝国におけるドイツ人とマジャール人による支配がスラブ系市民の不満を助長していると考え、ドイツ人、マジャール人、スラブ人が相互に補完する「三元主義」を唱えていた。ところがスラブ系市民にとってその提案は、汎ゲルマン主義にスラブ人を取込む施策と受け取られた。

ドイツ帝国 一八七〇年八月、フランスのナポレオン3世との戦争に勝ったプロシアは、翌七一年ヴィルヘルム1世が即位して「ドイツ帝国」と称した。以後、ドイツは帝政崩壊、ナチスの台頭など激しく変化する。本書では帝政時代を「ドイツ帝国」、一九一八年から三二年までを「ドイツ共和国」、ヒトラー内閣が成立した三年から四五年までを「ナチス・ドイツ」と呼んで区別する。ちなみにヴィルヘルム1世は一九一八年十一月九日に退位して帝政に幕が下ろされた。

レマルク Erich Maria Remarque / 1898～1970。ナチ

ス・ドイツによる反戦主義者弾圧により三二年にスイスに逃れ、三八年ドイツ国籍を剥奪されたのを機にアメリカ合衆国に亡命した。アメリカで四一年『汝の隣人を愛せ』、四六年『凱旋門』を発表するなど平和主義に基づく文筆活動を展開した。

西部戦線異状なし レマルクの小説。一九一六年、ギムナジウムの級友とともに出征し、西部戦線へ配属された体験をもとに、二九年に発表した。

袁世凱 Yuan Shikai / えん・せいがい / 1895～1916。河南省項城に生まれ、科挙の試験に二度落ちたため官吏を諦めて軍人となった。一八八二年朝鮮の壬午騒乱で大院君を天津に幽閉し、八四年には朝鮮甲申事変を鎮圧した。新建陸軍の責任者に抜擢され、義和団事件鎮圧で列国に知られた。一九〇一年直隸総督兼北洋大臣、清王朝滅亡後、中華民国第二代臨時大統領に就任した。一六元年旦に皇帝の地位に就き、国号を中華帝国と改めたが、三か月で帝位を取り消し、その三か月後に急死した。

日置 益 ひおき・えき / 1861～1926。一八八八年東京帝国大学法科大学法律学科を出て外務省に入った。一九一四年中国公使に就任した。対華二十一か条要求の交渉を担当した。

ソビエト Совет…ロシア語で「評議会」を意味する。ロシア革命においてマルクス主義者もしくはマルクス・レーニン主義の理論の下で組織された労働者の会議を指した。したがってソビエトは革命後のソビエト連邦ばかりでなく、中国共産党でも組織された。

アリハンゲリスク Altangetui / 「戦う大天使…アルハンゲリ」に由来する。ロシア北西部、白海に注ぐ北ドヴィナ川の河口近くの都市。

034 成金

第三十四

成 金

一

第一次大戦は、世界史においては、「帝国主義段階における内部矛盾が世界的規模で爆発した最初の世界戦争」と位置づけられている。

「野口八郎」のペンネームで大著『日本資本主義発達史』を書き上げた経済学者であり弁護士でもあった守屋典郎は次のように記す。

資本主義は二十世紀のはじめまでに帝国主義に発展し、ひとにぎりの先進諸国によって地上人口の圧倒的多数が植民地的抑圧と金融的絞殺をうける世界体制が成立した。しかし帝国主義諸国家の発展の不均等は飛躍的に激しくなつて、国家間あるいは国家群間の対立は激化し、世界戦争への危険が強くなっていった。

大戦の戦後処理を取り決めたのは、パリのベルサイユ宮

殿で結ばれた多国間条約である。史上、「ベルサイユ条約」と呼ばれ、その条約に基づく国際的な枠組みは「ベルサイユ体制」と称される。

その史的評価は次のようである。

一、ヨーロッパ至上主義が崩壊し、太平洋が新しい基軸となった。

一、ロシアに成立した社会主義国家ソビエト連邦が国際政治の転換を促した。

一、アジアにおける日本の勢力伸張が欧米列強から警戒の目で監視されるようになった。

以上の意味で、第一次大戦は「近代史の転換点」に位置づけられている。

だが当時、日本国内でこのことに気がついている人はいなかった。なぜなら日本経済は空前の活況を呈しており、大日本帝国の弥栄（いやさか）を信じて疑わなかったからである。

日本経済が活況を呈した直接の原因は、第一次大戦でヨーロッパの産業界が重大な打撃を受け、各国が生産する製品をアジアやアメリカ合衆国に輸出する余裕がなくなったためだった。なかでもドイツ帝国に依存していた染料や薬

品、化学製品の不足が顕著だった。

その分野の製品にかかる日本の企業に注文が集中した。おのずから、それまでヨーロッパの企業が大きなシェアを占めていたアジアや南米、アフリカ、オーストラリアなどに、日本製品の輸出が伸びた。ロシアやアメリカからも、毛布や電話機、陶器などが大量に発注された。

例えば革命前のロシア政府からは、軍用毛布千七百六十万ヤードの注文があった。このため日本毛織は全工場で二十四時間の生産を行ったが、それでも受注に追いつかなかった。

同じくロシア政府は、大量の軍用電話機を大倉組に発注した。最初の発注量だけで四万台という膨大なもので、逋信省がこれを日本電気と沖電気工業に二万台ずつを割り当てた。逸見治郎が苦心の末に完成させた孟宗竹の計算尺が輸出されたのもこのときだった。

アメリカからはボーン・チャイナが日本に発注された。これはホテルやレストランなど民需用だった。ヨーロッパの陶器メーカーから輸入が激減したため、その代替として日本製の陶器が求められた。

森村組が窓口となり、日本陶器が生産した。白磁の大皿の年間受注量は、最初一万セットだったが、三年後には十万セットを上回った。このために同社はホレリス式統計会

計機械装置を設置して管理業務を行った。

生産地の名を付けた陶器は「ノリタケ・チャイナ」と呼ばれ、現今にいたっては「オールド・ノリタケ」として高価で取引されている。

企業の利益率が好況のすごさを物語っている。

一九一四年上期における主要な企業の平均利益率は一四・八%だった。それが二年半後、一九一六年下期には四四・〇%に増加し、ピーク時の一八年下半年は六三・三%に達している。何でも売れ、いくらでも儲かるという時代だった。

この間の貿易収支を見ると、一九一六年に約十二億円だった輸出額は、三年後に約二十一億円に、輸入額は約八億円から約十八億円に急増した。一九一六年から一八年まで三年間の貿易黒字は十三億円に達している。

貿易の急伸で海運業が興隆し、鉱工業、紡績業、木材業、電信・電機業などが軍需で巨利を得た。信じられないほどの富が、驚くほど短時間に個人に集中し、いわゆる「成金」が相次いだ。

二

幸運の神は、「風に乗って駆け抜けていく」といわれる。

その前髪を捉えることができた成りあがり、江戸のころは「梅ノ木分限」「にわか分限」と呼んだ。

「梅ノ木分限」という言葉には、

——梅の木は早く伸びるが大木にならない。

という皮肉な洒落が含まれている。

対置語は「くすのき分限」。

嵐の中に船を漕ぎ出したみかんで成り上がった紀伊国屋文左衛門は、それだけなら「梅ノ木」だったが、のち紀州の材木で上野寛永寺根本中堂の建立を請け負う大商いをやってのけた。

彼は徳川將軍綱吉のお側用人・柳沢吉保に接近して財を成し、吉原で黄金を撒きに撒いた。その豪遊ぶりばかりが喧伝されるが、文左衛門という人は利に聡く、清濁併せ呑む剛腹でもあった。

吉原での豪遊について、彼は、

——このことが江戸市中の暮らしにつながる。

という哲学めいた考えを持っていた。

彼の遊びは、いわば公共事業でもあった。

ただ、吉保に接近しすぎ、貨幣鑄改に関与したことが命取りになった。吉保が失脚し、新井白石が改革に乗り出すとともに没落し、最後は深川八幡近くの寓居で暮した。往時を物語るのは金時絵の椀一つであったと伝えられる。

これに対して「成金」という言葉は、新聞が作り出したらしい。折から将棋ブームだった。

西の坂田三吉、東の関根金次郎が「王将」「名人」の座をめぐる激突し、新聞各紙がこぞつてその話題を取り上げていた。前に一つずつしか進めない「歩」が敵陣に入つて「と金」に成る。庶民には分かりやすい喻えだった。大から小まで「成金」が誕生した。

その先駆をなしたのは相場師「鈴久」こと、鈴木久五郎であろう。

彼は日露戦争の最中、強気一点張りの仕手戦で、あつという間に一千万円の大金を手に入れた。今に直せば三千億円にも相当する。

高給料亭で同時に五つも六つも宴会を開き、畳に撒いた銀貨を仲居女たちに拾わせ、向島の自宅から兜町に通うため、自分と妻、使用人のために四台の二頭だて馬車を注文した。日本に亡命していた孫文を妾宅に招いて十万円を渡し、変革運動の支援者を気取ったりもした。

一九〇七年、「ガラ」がやってきた。株式相場が暴落したのだ。彼は頂点から奈落の底に突き落とされ、孫文が中華民国を樹立したとき、彼は巢鴨の借家で天涯孤独のわび住まいを営んでいたと伝えられる。このあたり、紀伊国屋文左衛門の晩年とよく似ている。

内田信也是一九一五年に三井物産を退社し、兄や知合いから借りまくった二万円を元手にして「内田汽船」を設立した。二百円の家賃が払えなかったにもかかわらず、八馬汽船が保有していた排水量四千五百トンの船を月四千二百円で借り、これを材木の輸送に月八千円で貸し出した。

内田は儲けた金で手当り次第に船をチャーターし、一方、自らも船を保有して海運を営んだ。その結果、二年後には十六隻の船舶を持ち、横浜に造船所を建設するまでになっていた。

あるとき首相・大隈重信の宴会に招かれた。

——これくらいならオレにもできる。

と考えた彼は、神戸市の須磨に迎賓用の大邸宅を建設した。洋館のほかに五百畳の大広間を備えた迎賓館は「須磨御殿」と称された。

一九二四年（大正十三）、政友会から衆院選に立候補して当選、海軍事務次官、逓信省政務次官を経て岡田啓介内閣で鉄道相、東条英機内閣で農商相を務めた。第二次大戦後、公職追放を受けたが五二年に復帰し衆院議員となり、第五次吉田茂内閣で農林相。なかなかしぶとい人生だった。

神戸に本社を構えた鈴木商店は、台湾の砂糖や樟脳を扱っていたが、大戦で軍が買い込むことを見越して米を買い

占めた。これがために米騒動で焼打ちにあった。総資産は五億六千万円を超え、系列会社は六十に及んだという。のち昭和金融恐慌のとき、渡辺銀行の破綻に連鎖して倒産の憂き目にあった。

その大番頭だった金子直吉は、その最盛時に次のように述べている。

今当店のなしおる計画は、すべて満点の成績にて進みつつあり。お互いに商人としてこの大乱の真中に生まれ、しかも世界的商業に関係せる仕事に従事し得るは無上の光栄とせざるを得ず。すなわちこの戦乱の変遷を利用し、大もうけをなし、三井・三菱を圧倒するか、しからざるも彼らと並んで天下を三分するか。これ鈴木商店全員の理想とするところなり。

彼は個人で鉄を買占め、三億円の資産を築いたと伝えられる。ただ彼の場合は出来星の成金ではなかった。一八九九年以前に台湾総督・後藤新平と結んで台湾樟脳専売法を成立させて利権を確保し、大日本塩業、日本油脂、帝国麦酒などを創立し、日本製粉、大正生命保険、日本金属、六十五銀行などの設立に関与した。

茨城県で銅山を経営していた久原房之助は、銅の急騰で

大いに儲け、その資産は一億円を超えた。敷地三万五千坪の別邸を神戸市住吉に建設し、落成式には大阪、神戸の芸者を総拵げにして、屋敷の前を通る者にご馳走を振舞った。のち、事業のすべてを義兄・鮎原義介（日産コンツェルン総帥）に譲り、政友会に参加して田中義一内閣で通信相に就いた。

彼は一方では手堅く事業を営み、日立鉱山を設立した。のちに東京電燈会社から小平浪平を電気技師として迎えて鉱山用の電動ポンプを製品化したのがきっかけで、発電機や発電機の総合メーカー「日立製作所」を興すことになる。白石元治郎は浅野商店、東洋汽船を経て、移籍した鉄工所の経営者となった。空前の鉄需要で儲けた金のすべてを会社の資本金に注ぎ込んだ。第一次大戦前に二百万円だった資本金は、大戦が終結した時には八倍の一千六百万円に増大していた。NKK日本鋼管の基盤はこうして固まった。のち白石には「鋼管王」の異名が献じられている。

三

一九一七年八月三十一日付「読売新聞」に次のような記事が載っている。

突如株式の大崩落

不正買占の取締が其の主因 一部成金の肝を寒からしむ馬鹿になって只、買へば可いと称せられてゐた兜町へ三十日の午前嵐のやうな大崩落が襲来して一部成金の肝を寒からしめた。

取引所内はワツと云ふ鯨波の声に等しい雑音と共に各仲買店員が電光の如く飛交ふ有様。

後場は立合を中止。欧州戦争の結果、供給と需用との釣合が保たずに物の相場を吊上げてゐるのも事実だが、大部分に人為的の競り上げが行はれてゐる中で、不正な買占者を嚴重に取締まると云ふ農商務省の省令が九月一日から実施されると云ふことに驚いたのである。成金連が儲けた金が思惑の買占を行つた結果、米雜穀、油、綿糸の主要品に次いで味噌醬油、沢庵、梅干、薪炭の類までも天井知らずに騰貴を告げてきた。

記事中にある「農商務省の省令」というのは、「暴利取締令」のことである。穀類、鉄、石炭、綿糸などを買い占め、暴利をむさぼる者には、戒告、三か月以下の懲役または百円以下の罰金を科すというのが、その内容だった。味噌醬油、沢庵、梅干までが高騰したというのは、バブル以外のなものでもない。

- ・ 暗い料亭の玄関を照らすのに十円札に火をつけた。
- ・ 悪くもないのに歯をすべて抜いて金の総入れ歯にした。
- ・ 吸い物の椀を開くと生きたウグイスが飛び出した。
- ・ 節分に銀の粒をまき、芸者に競って拾わせた。
- ・ 田舎の分限者が高価なラヂオを買い込んで株式相場に耳を傾けた。

・ 張り合つて高級料亭を借り上げ大宴会を開いた。

・ 鯛の目玉の周りの肉だけで蒲鉾を作らせ、一人前百円の料理を出させた。

・ 住宅四十八戸を取り壊してそこに東海道五十三次を模した庭を造った。

・ 裾模様には白金とダイヤを使った和服を仕立てた。

・ 指輪、時計、帯留め、櫛、簪は金か白金、そこにダイヤ、宝石をちりばめた。

このような悪趣味かつ愚劣をきわめた伝説を、「成金の時代」は数多く残している。

とはいえこれもまた、時代であつた。

のちにアメリカのコンピュータ・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社からホレリス式統計会計機械を輸入することになる森村商事の森村開作（六代目

市左衛門）も、この景気に乗ってしこたま儲けた一人である。森村については後に詳述する。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

守屋典郎 もりや・ふみお／1907～1996。一九二九年東京帝国大学法学部を出て弁護士となった。三三年共產党に入って「野口八郎」の筆名で文筆活動を行った。

大倉組 大倉喜八郎(1837～1928)が創業した「和泉橋通藤堂門前自身番向大倉屋」が発展、一八九三年「大倉組」となり、中堅財閥となった。その建設・土木部門「大倉土木組」のちに「大成建設」と改称した。系列会社にはホテルオークラ、帝国ホテル、日清製油、日本無線、日本化学工業、大日本麦酒などがあつた。

紀伊国屋文左衛門 きのくにや・ぶんざえもん／没年について公式な記録は残っていない。豪商・奈良屋茂左衛門と競い、権力中枢の幕府官僚を饗応し利権を拡大した。一七〇八年に十文銭の鑄造を請け負ったが一年余りで通用禁止となり、それがきっかけとなって家運が傾いた。

若いころは冒険心に富み、決断力と功名心で成り上がったのに対して、晩年の行動が一致しないことから、放蕩と家運衰退の原因を作ったのは二代目文左衛門であるという説もある。山東京伝の『近世奇跡考』(二八〇四)には、享保十九年(一七三四)四月没とある。享年六十六。「帰性融相信士」と戒名し、墓は深川浄等院にある。

坂田三吉 さかた・さんきち／1870～1946。大阪の貧家に生まれたことは確かだが、幼年期のことは伝わっていない。関西将棋界で頭角を現し、一九二五年「名人」を自称して関東将棋

界の関根金次郎と対決した。独自考案した「坂田流向い飛車」はのち関西棋流の本流となった。死後、日本将棋連盟から「名人」「王将」位を贈られている。北条秀司の戯曲『王将』、村田英雄の歌謡曲『王将』および、北島三郎の『歩』などのモデルとなった。

関根金次郎 せきね・きんじろう／1868～1946。千葉県に生まれ、第十一世名人伊藤宗印の門に入り関東将棋界を代表する存在となった。一九二一年第十三世名人となり、坂田三吉の挑戦を受けた。坂田との戦いには勝ったものの、将棋界の近代化の必要性を痛感し、三五年自ら名人位の世襲制を廃止し選手権制への移行を決断した。

鈴木久五郎 すずき・きゅうごろう／1877～1943。ガラ 株式相場の暴落をモノが崩れるときの擬音に喩えた。

内田信也 うちだ・のぶや／1880～1971

八馬汽船 はちうま・きせん／一八六一年八馬兼介(はちうま・かねすけ／1839～1918)が開業した米穀小売商を起点に、一八七八年「西尾丸」という帆船を購入して海運業に転身した。二〇二三年現在、兵庫県神戸市に本社を置き、日本郵船グループに属している。

鈴木商店 武蔵国(埼玉県)川越の下級武士だった鈴木岩次郎(1841～1894)が一八七七年に砂糖・樟脳商として神戸に創業した。岩次郎の死後、妻ヨネ、番頭の金子直吉が製鋼部門にも事業を拡大した。鈴木商店は倒産したが、その傘下にあったのは播磨造船所(のち石川島播磨重工業)、鳥羽造船所(のち神戸製鋼所)、帝国人造絹糸(帝人)、豊年製油、旭石油、帝国樟脳、信越電力(のち北陸電力)、南朝鮮鉄道、東洋燐寸、帝国汽船、帝国麦酒(サッポロビール)などだった。また金子直吉と並んで番頭を

務めた鈴木岩次郎は、鈴木商店倒産後、日商（日商岩井、のち「双日」と改称）を設立した。

金子直吉 かねこ・なおきち／1866～1944。

久原房之助 くはら・ふさのすけ／1896～1965。第二次

大戦後、A級戦犯容疑で公職追放となった。

鮎原義介 あゆはら・ぎすけ／1880～1967。

白石元治郎 しらいし・もとじろう／1867～1945。

## 035 米騒動

第三十五

米騒動

一

成金が湯水の如くに金を使う一方、庶民の生活は苦しくなっていた。物価の上昇に給与が追いつかなかったためだった。

一九一三年（大正二）の平均値を一〇〇とする指数で見ると、一九一八年の株価は一七九・三だった。これに対して卸売物価は二一六・六と、実に倍以上に跳ね上がった。わずか五年で物価が倍以上に値上がりしたのでは、庶民の生活が逼迫したのも当然だった。

ことに公務員がひどかった。

公務員は「社会への奉仕者」「納税者の養い人」ないし、地域の名士・富農の名誉職という位置付けだった。中央官庁の上級職は別格であって、行政職員や教員、警邏など現業部門の一般職員は民間企業の勤め人より給与が低かった。

——何も作っていないのに給料がもらえる楽な仕事。

——というのが一般の感覚だった。米を作ることが最もたい

せつな仕事と考えられていた時代である。

インフレで庶民の生活がいかに圧迫されていたかを端的に示す投書が、一九一八年（大正七）二月の「東京朝日新聞」に載っている。投書の主は小学校の教員であった。

自分は月俸二十円の小学校教員である。家族は自分等夫婦のほか、親一人、子供二人の五人ぐらし。米は平均一人前三合として日に一升五合、一カ月四斗五升は要る。一升二十四銭として月十一円二十五銭、野菜、味噌、しょう油、マキで三元。冬季は炭が二十貫要るとすると、十貫目三元として六円。石油が二升、一升三十銭として六十銭。すなわち必要欠くべからざる生活品だけでも二十円八十五銭になる。しかも互助会といって四十銭を天引かれ、茶話会費といつては二十銭を引かれるので、実際手に入る金は十八円余。これでどうしてくらしてゆけようか。

——何ともみみっちい。

と責めてはいけない。

地方の教職員は現今のように公務員として扱われず、給料は低く預貯金もなく、かつ第一次大戦後のインフレと不況で給料が未払いというケースが続出していた。教員だけのことではなかった。また、都市地域に限った現象でもな

かった。

農村地域では毎月の安定した現金収入がなかったために、生活費の高騰はさらに悲惨な事件を起こしていた。日吉明助という人が書いた『貧の研究』という本には、当時、実際にあった様々な出来事が記されている。

米は豊作が続いていたにもかかわらず、値上がりに歯止めがかからなかった。標準米の価格は、一九一六年に一石（十斗＝百升＝千八百リットル）当り十三円二十六銭だったが、一七年には十九円三十五銭に、一八年には三十一円八十二銭に高騰した。

都市部における白米の平均売価は、一八年一月現在で一升三十銭前後であったから、新聞に投書した教員の妻は必死に安い米を探し回ったのかもしれない。

米価が高騰した原因としては、都市人口がにわかに増えた結果であるとする説がある。

農村部の働き手が都市に流出し、生産に従事する労働力が減少した。これに対し、消費する人口だけが増え、需給バランスが崩れた、という。

また一九一六年の米が天候不順による不作という事実もあった。

だがそれだけが原因ではなかった。山東半島や満州での緊急時に備えて、軍隊が米を大量に購入したのである。こ

のため、少しでも高く売ろうと農家や仲買人が出し惜しみをした。加えて寺内内閣は地主階級が主な地盤であったため、思い切った米価安定策を講じなかった。

そのために米もまた、第一次大戦後の投機の対象となつたといわれている。「物価騰貴に処する中流主婦の覚悟」と題した評論を、雑誌「主婦之友」が掲載したのはこのころである。

寺内内閣が示した「シベリア出兵」計画は不評だった。その原因は、世界規模で政治・経済の構造が変化していることへの警戒心ではなく、苦しい生活を余儀なくされていた庶民が、無駄な戦費の自粛を求めたことによっていた。

## 二

一九一八年。

この年の米は、前年までと打って変わった天候不順のため、かつてない凶作が予測されていた。農家や米問屋が出し渋った。加えて北陸地方の漁師の家は、北海道のニシン漁が振るわなくなったため、出稼ぎの場所を失っていた。そこにシベリアへの出兵が追い討ちをかけた。

こうした中で、その年の七月二十三日、富山県の魚津でちよつとした騒動が発生した。



発端はその前夕、魚津の漁師の女房たち三、四人が井戸端会議で、

「米が、この港から積み出されているそうな」

「そりゃ、ますます米が足りなくなつて値上がりするわ」

「富山の米を、どうして富山の人間が食えんのか」

と話したことにあつた。

事実、魚津港には伊吹丸という輸送船が停泊していて、県内産の米を次々に積み込んでいるさなかだった。

翌日、米の県外積出しを阻止しようと四十六人の主婦が海岸に集まつた。駆けつけた警官が説得してこの日は何ごともなかった。魚津での出来事が近隣の村々に伝わると、それぞれの地域で小規模な集会が開かれ、

「米の県外持ち出しを阻止すべし」

という声が自然に形成されていった。

それから六日後、東京の店頭で販売される米の値段がいちだんと吊り上がった。一円で二升四合というから一合が四十二銭である。三十一日、ついに東京米穀市場は取引の立会いを停止するにいたつた。

八月三日になると、近隣の漁師の女房も参加して、総勢約百八十人が魚津の西水橋町の海岸に集まり、やがて隊を組んで米屋や有力者の家などに押しかけた。翌四日夜、隣接する東水橋町で漁師の家族など六千七百人が米屋などに

押しかけた。

八月三日付「東京朝日新聞」記事。

富山県中新川郡西水橋町民の大部分は出稼業者なるが、本年度は出稼先なる樺太は不漁にて、帰路の路銀にも差支ふる有様にて、生活頗る窮迫し、加ふるに昨今の米価暴騰にて、困窮愈其極に達し居れるが、三日午後七時漁師町一帯の女房連二百名は海岸に集合して三隊に分れ、一は浜方有志、一は町有志、一は浜地の米屋及び米所有者を襲ひ、所有米は他に売らざること及び此際義侠的に米の廉売を嘆願し、之を聞かざれば家を焼払ひ、一家を襲殺すべしと脅迫し、事態頗る穩かならず。斯くと聞きたる東水橋警察署より巡查数名を出動させ、必死となりて解散を命じたるに、漸く午後十一時頃より解散せるも、一部の女達は米屋の附近を徘徊し米を他に売るを警戒し居れり。

地元紙「高岡新報」は八月五日付で次のように報じている。

朝来、同町の女房子供は三々五々なにごとかひそかに語りあいて不穩の模様ありしが、がぜん薄暮七時頃にいたるや、おのおの家をでて海岸に集合する者六、七百名の多数

におよび、町長、町議に瀕死の窮状を訴え、ともに米屋、地主の家に押しかけ、署員全部この女軍の解散につとめたるも、多勢に無勢にて警官の制止に耳をかさず、全町をかえるが如き騒擾のうちに夜半十二時すぎにようやく鎮静。当夜なかならず喧騒をきわめたるは新上町高松長太郎方にて、目下白米千俵を所有せるにより、数百名の女軍の一隊は同家をおそい、居合せたる長太郎妻に対して米を売るなどというや『私の所は商売だから売るも売らぬも勝手なり』と言放ちしことから女軍はおおいに怒り、悪罵をあげせかけ、殺氣立ちて一時はいかなる椿事を出来せんかはかりがたき形成。

米を売れと迫る女軍に

「うちは商売だからね。誰に売ろうが売るまいが勝手じゃないか」

と言いつ返しした米屋の女房の気魄がすごい。

この勢いは翌日も続き、制止した警官が負傷したことから、男一名、女三名を検挙したところ、警察署をデモ隊が包囲して釈放を求め、さらに東京に向けて動き出した貨物列車から米数百俵を荷降ろした。

翌七日になると東西水橋町の町民と滑川町の町民が合流して一万人を超える暴徒となり、伊吹丸に米を積み込もう

としていた船員、沖仲士などに暴力をふるい、夜半にいたって二千人が米屋を襲撃して破壊行為に及んだ。

米騒動の発端であつた。

### 三

八月初旬にこの騒動は富山全県に広がり、收拾がつかないうち全国各地に飛び火した。

「大阪朝日新聞」八月十日付記事。

岡山精米会社の特等白米は、暴騰また暴騰ついに五十円七十銭（一石）となり、市民一般さんたんたる状態におちいりたる折柄、岡山市内山下吉田石蔵（三八）、森下町水沢三太郎（三六）らは十数名の若者と語らい隊を組み、九日午前九時半岡山米穀取引所におしかけ、立会の終わるのを待伏せ、貧乏人の敵だ、たたき殺せとわめきたて、鉄拳をふるって仲買人らに喰ってかかり、客筋連はろうばいして逃げまよう騒ぎに、数百人の群衆、喧嘩の渦にまきこまれ、口々に『仲買人は人類の敵だ』と絶叫し、アワイ一大事に及ばんとしたり。急報に接し、岡山署にては各駐在巡查を召集し、署員また現場へかけつけ、ようやくにして取りしずめ、警察署へ連行した。

同じ八月九日には、岡山県津山町、香川県高松市などでも類似的デモがあった。

大がかりで深刻だったのは、京都、名古屋など大都市で発生した騒動——ほとんど「暴動」といいいい——だった。

京都市で八月十日に起こった騒動は、買い占めによる米不足と米価の高騰に怒る民衆の蜂起とは趣が異なった。中心になったのは、そのころ京都市郊外にあった被差別部落だった。

戸数は一千六百戸、人口は七千余人を数えていた。日ごろから何かと差別を受けていたために、その半数以上は「貧」を通り越し、「極貧」というべき生活を送っていた。米価の高騰をきっかけに、日ごろの鬱憤が爆発したといっている。

夜八時すぎ、一団の群衆が市内東七条の巡査派出所を襲った。重さ四キロに近い石を投げつけて派出所の表戸を破壊した後、七条高瀬川下ルに店を構えていた沼田米店の表戸を壊して乱入した。沼田米店は米の売り惜しみで市民から疎まれていたので、観衆が騒動に参加し始めた。

数を倍以上に増やした群衆は誰いうともなく数隊に分かれ、沿道の市民をさらに加えながら、その夜のうちに三十

軒以上の米屋に石を投げ、「白米一升三十銭で売ります」と半紙に書かせてこれを表に貼り出した。

鎮庄に出動した警察が十四名を逮捕したが、数十名が七条署に押しかけて釈放を強要した。このため、遂に京都憲兵隊が出動した。

翌日夜には市内の十数か所で暴動が起こった。

その数は二万人に達したという。

もはや警察力では抑えきれないと判断した京都府は、知事の名で陸軍第十六師団に出動を要請した。伏見から歩兵二百、騎兵六十三が出動した。

西三条北小路地域の四囲をすきまなきまでに包囲し、戸毎に同夜の暴動に関係ありとみとめたものを拉致し、三十余本の竹槍、棍棒、その他の利器に付着したる血痕目じるしを根拠に、強烈なる検挙をはじめ、六十余名を逮捕。

と「京都日出新聞」は記す。

この京都の騒動から、米騒動が質的に変わった。

政府は十三日に

——米穀を強制的に買い上げるため、一千円程度の国庫支出を行う。

と決定し、翌十四日、米騒動に関する報道を控えるよう

新聞各社に要請した。しかし民衆の意識は米の問題から離れていた。

市民や労働者の暴動は米問屋の打ちこわしにとどまらず、米不足とまったく関係のない地方の豪農・豪商が焼打ちにあったり、警察署が攻撃されたりした。米の暴騰そのものでなく、経済の不安定と社会の格差を誘発した資本家、資本金家をなすがままに放置した政治への不信、差別への怒りが折り重なり、政治的な運動に転換していく。

京都市で被差別部落の住民を中心に騒動が起こっていた八月十日、名古屋市では

——鶴舞公園で集会のあと、米買占めの仲買人を懲らしめるような。

という噂が流れていた。

その根拠ははっきりしなかったが、午後八時過ぎまでに、噂を聞きつけた市民六千人が鶴舞公園に集まった。公園に向かう電車は超満員で、午後九時には参集者が二万人を超えた。しかし警察が総動員で米屋町への通路を遮断したため、群集は午前一時過ぎに散りじりになった。

翌日夜、同じ鶴舞公園には前夜をはるかに上回る群集が集まっていた。

このときのデモは、とうとう警官隊ともみ合いになり、三十三人が騒擾罪で逮捕されている。暴徒化した民衆の鎮

圧には、旧士族や元軍人・警官などで組織する郷士会がその一翼を担った。日の丸の鉢巻を締め、剣道着の袴の裾をからげた五十年配の男たちが、白刃や木刀で武装してデモ隊に立ち向かった。そういう写真が残っている。

首相・寺内正毅は最後まで米騒動の本質を理解できなかった。シベリア出兵を強行したことが政治家寺内の命取りとなった。憲政会が政府の対応を非難し、近畿関西新聞記者大会が内閣弾劾を決議し、その波が東京に及んで初めて、彼は二進も三進も行かない袋小路に追い込まれたことを察知した。

## ~~~~~ 補 注 ~~~~~

北海道のニシン漁 一八九七年に九十七万トンの漁獲高を記録したのをピークに、道南地区から順次、漁獲高が低迷していった。北陸地方は江戸期、松前船を通じて北海道と深い関係があり、この地方の農民や漁民がニシンの季節になると北海道に出稼ぎに行った。田植えが始まる前のひと稼ぎという意味で都合が良かった。現在、北海道各地に残る「ニシン御殿」はいずれも大正期に建てられた「記念碑」的な存在が少なくない。

なぜニシンが北海道の海から消えたのか、その原因には①乱獲②太陽黒点の活動の影響③海水温度の上昇④森林の伐採——などが指摘されている。このうち「森林の伐採」説が最近になって有力視されている。ちなみに北原ミレイ唄うところの『石狩挽歌』（なかにし礼作詞、浜圭介作曲）は、なかにし礼自身の体験でもある。

騒動の波及 富山県で発生した米騒動は一都三府三十八県三十九市百三十四町百四十五村に及んだ。うち七十以上の市町村で軍隊が出動した。

京都日出新聞 一八七九年「京都商事迅報」として創刊され、「商事迅報」「京都新報」「京都滋賀新報」「中外電報」など紙名が様ざまに変わり、一八九七年「京都日出新聞」となった。一九四二年、戦時下の新聞統合で「京都日日新聞」と合併して「京都新聞」となった。

米騒動の質的变化 七月二十二日から八月十日前後までの騒動は米の売価高騰と売惜しみに対する庶民の怒りが爆発したかたちだ

った（第一期）。しかし八月十二日、名古屋市の騒動に軍隊が出動した時点で騒動は「労働者対資本家」の関係に変質した（第二期）。次いで八月十七日にいたって山口県宇部市の沖ノ山炭坑における騒動で軍隊が実弾を発射し死者十三、重症者十五人を出した時点で「庶民対国家権力」の構図に変化した（第三期）。福岡県峰地炭坑の騒動で抗夫たちは炭坑からダイナマイトを持ち出して対抗した。

## 036 大正デモクラシー

第三十六

大正デモクラシー

一

一九一八年七月二十三日に富山県魚津に端を発した米騒動は、八月十二日、神戸市に飛び火した。三菱造船所の労働者八千人が蜂起し、鉄棒やレンガを使って工場の購買部倉庫を破り、機械装置などを破壊したのだ。夜になると市民三万人が加わり、いったん湊川公園に集まったあと、鈴木商店の打ちこわしに走った。

鈴木商店は後藤新平と親密な関係にあつて、台湾の利権でのしあがった。米七十一万俵を輸出し巨利を得たほか、寺内内閣では外米、朝鮮米の買付け指定商人となっていた。こうしたことから、市民が「米商人」として思い浮かべる筆頭にあつた。

「報知新聞」の特派記者として米騒動の様子を取材していた新聞記者がいた。その記者の名は鈴木茂三郎といった。一八九三年（明治二十六）、愛知県蒲郡の貧しい人力車夫の家に生まれた。一九二二年（明治四十五）に東京に出て、

人力車製造業で小僧として働き、働きながら早稲田を出て新聞社に入った。

その取材遍歴がすごい。

ロシア革命（一九一七年）

米騒動、シベリア出兵（一九一八年）

朝鮮万歳事件（一九一九年）

原敬暗殺（一九二二年）

日本共産党結成（一九二三年）

関東大震災（一九二三年）

治安維持法公布（一九二五年）

金融恐慌（一九二七年）

初の衆議院議員普通選挙（一九二八年）

と、二十世紀初頭の大事件にことごとく関わっている。

鈴木的能力ばかりでなく、記者の数が限られていて、一人で何役もこなさなければならなかった、ということである。であるにしても、大正期の激動に立ち会った伝説の人物であることに違いない。

第二次大戦後、一九四六年に衆議院議員となり、一九五一年から五九年まで日本社会党委員長を務めた。

その鈴木が、神戸騒動の模様を書き残している。

栄町四丁目の鈴木商店の元本宅が焼かれ、細民をいじめ

つけていた貸家管理所の兵神館、鈴木 of 兵庫精米所が焼かれ、鈴木 of 代弁新聞「神戸新聞」の三層楼が焼け落ちた。

群集は、建物の前を遠くからこんで、石を投げつけている。するとガラランとガラスが破れて落ちる。電灯が消える。二つ三つの黒いかたまりが鉄砲玉のように飛び込んだと見るまに、なから格闘らしい雄叫びの声が聞える。

「やれッ、やれッ」

と群集がどなり合う。まもなく建物のなから真赤になつて燃え上がった。

十三日になつて兵庫県知事は陸軍姫路師団に出動を要請かつ警官に「抜剣差支えなし」の許可を出した。斬つてもいい、というのである。

暴徒と化した民衆と警官・歩兵隊との衝突は十四日になつても収まらなかつた。県当局は遂に市民に外出禁止令を出すとともに、軍隊の増派を要請した。警察、軍隊との衝突による死者は、確認されただけで四名を数えた。

以後、八月十三日・大阪、十四日・東京と続き、十七日に山口県宇部で発生した騒動で、鎮庄に出動した軍隊がついに実弾を発砲した。死者十三、重傷十五を出し、十七日から二十日夜に起こつた静岡の暴動では死者二、負傷数十

名が出た。

宇部の騒動については次のような記録が残っている。

坑夫軍のほうでは「日本軍が日本人を撃つわけがない」といつて突進した。両軍の先頭どうしの距離わずか一間。実に息つまるような光景であつた。坑夫軍の正當かつ正直すぎる確信にもかかわらず、軍隊は実砲をぶつ放した。

一間、つまり二メートル足らずの至近距離から実弾を发射されてはたまらない。死者十三、重傷十五が出た。文面以上に阿鼻叫喚の光景が展開されたに違いない。朝鮮でも、もう一つの米騒動が起つていた。

大日本帝国政府は日本国内での米不足や陸軍の食料調達需要を満たすため、朝鮮で「産米増殖計画」を推進し、半島南部の農村部に多額の資金を投下して土地改良や農業技術教育などを行つた。

その結果、朝鮮における米の生産量は大幅に伸びた。にもかかわらず、大半が日本列島に運ばれて行つた。これが反日感情を刺激し、抗日独立運動につながっていく。大日本帝国政府は国内における批判勢力や朝鮮独立運動に対して共通に軍事的武力圧力で鎮圧することになった。

かつての新左翼風にいうと



——権力がその本性をむき出しにした。  
ということになろうか。

市民運動を力でねじ伏せたという意味で、米騒動は、市民生活に官憲と軍隊の圧力を強めるきっかけになったともいえる。

## 二

「大正」という年号は、明治天皇の代が長かったこともあって、わずか十五年（実際には十四年と五か月）しかない。一九一二年七月三十日に明治天皇が薨去したのに伴って皇太子・嘉仁王が踐祚したのだが、即位はそれから三年四か月ののち、一九一五年十一月十日までできなかった。

しかも翌年十一月には、皇后節子との間に誕生した廸宮（みちのみや）十六歳をもって皇太子（このとき名を「裕仁」と改めた）とし、二二年十一月、病を理由に皇太子を摂政に任じた。

まず前例がない。

大正天皇の即位がずっとあとだったのは、「明治大帝の諒闇」（服喪）のためであったとされている。だがそれは表向きの理由に過ぎない。明治天皇が即位したのは孝明天皇薨去から二年後の一八六八年八月二十八日だったし、昭

和天皇の即位も踐祚から二年後の一九二八年十一月十日だった。

嘉仁王が即位の式典を三年四か月も待たされたのは、「大正政変」と呼ばれる平和的クーデターが起こっていたためであった。それは、政党と軍部の駆け引きのかたちで展開された。

明治末の十余年は、桂太郎と西園寺公望が交互に政権を担った。

- ・一九〇一年六月二日—〇五年十二月二十一日 桂太郎。
- ・一九〇六年一月七日—〇八年七月四日 西園寺公望。
- ・一九〇八年七月十四日—一一年八月二十五日 桂。
- ・一九一一年八月三十日—一二年十二月五日 西園寺。
- ・一九一二年十二月二十一日—一三年二月十一日 桂。

桂太郎は弘化四年（一八四七）長州に生まれ、幼名を「寿熊」といった。「寿熊」は「ながくま」と訓む。

文久三年（一八六三）、高杉晋作の下で馬関戦争に従軍し、明治に入ってドイツに留学した。帰国して陸軍大尉、のち参謀本部でドイツ兵制に準拠した軍令・軍政を整え、陸軍次官として山県有朋、大山巖（いわお）を補佐した。なかなか憎めなかった人であつたらしい。

三省堂『日本人名辞典』には、

巧妙な人心収攬策はその肥満福相とあいまって（ニコボン内閣）とあだなされ、官僚と政党人、大ブルジョア間の橋渡しを果たした。

とある。

笑顔で「頼むよ」、ポンツと肩を叩かれると、反対派も懐柔された、ということであろう。一九一三年十月没。

一方の西園寺公望は嘉永二年（一八四九）、九清華家の一である徳大寺公純の次男に生まれ、西園寺家の養子となった。フランスのソルボンヌ大学に学び、維新政府では参与。一八七一年に再びフランスへ渡り、このとき中江兆民と親しく交わった。

八一年に帰国して明治法律学校（のちの明治大学）を創設し、同じ年に「東洋自由新聞」を興した。第二次、第三次伊藤博文内閣で文相、一九〇〇年政友会創立に参加し〇三年総裁。一九四〇年十一月に没し、国葬が執り行なわれた。

コトは第二次西園寺内閣の一九一二年十二月二日に起こった。

かねて陸軍が強く要求していた二個師団増設の案件を、

議会が否決した。このため、陸軍大臣・上原勇作が辞表を提出したのである。

西園寺は事態の收拾を図ろうとしたが後任大臣が決まらなかったために瓦解し、陸軍は内大臣に退いていた桂を起用した。

陸軍の師団増設には、財界が反対だった。

東京の新聞・雑誌記者が「憲政策振会」を結成して、師団増設反対のキャンペーンを張り、桂が第三次内閣を足させる二日前には第一回の憲政擁護大会が東京・歌舞伎座で開かれた。

翌一月十七日、全国記者大会が催され、ここで「憲政擁護・閥族掃蕩」が決議され、同月二十四日の第二回憲政擁護大会を経て二月十日、議會を数千の民衆が包囲して暴徒化した。

彼らは警官隊と衝突したばかりでなく、当たるを幸いに騎虎の勢いで新聞社や交番を襲撃した。一九〇五年九月五日に発生した日比谷焼き討ち事件が再現された。この動きは大阪、神戸、広島、京都などにも広がり、このために桂は総辞職に追い込まれた。

民衆の力が内閣を倒したという意味から、「大正デモクラシー」を象徴する事件とされている。

だが果たして、真のデモクラシーであったかどうか。

三

憲法擁護運動は米騒動が起る五年前の出来事だが、民衆が集団をなして暴徒化し、これがたちまち全国に波及するところなど、共通するところが少なくない。憲法擁護の集會は大阪、香川、福島、宮城、岩手など全国で開かれていたから、火の手が上がるのも早かった。

しかしこの運動が純粹に民衆によつて起こされたかという、甚だ疑問が残っている。

そもその発端は陸軍が要求した師団増設問題であつて、それに反対だったのは財界であつた。特に三井財閥は交詢社を中核に桂内閣の打倒と元老の排除を決意し、新聞記者と政党政治家を動員して一大キャンペーンを展開した。

第一回憲法擁護大会では、

閥族の横暴跋扈今や其極に達し憲政の危機目睫に迫る。吾人は断固妥協を排して閥族政治を根絶し、以て憲政を擁護せんことを期す。

という声明を決議した。だが実態としてその内容は、交詢社の意思を反映したものだつた。

大久保利通の孫で候爵・貴族院議員でもあつた大久保利謙は、

——ブルジョアジーと政党が手を結んだ同盟戦線の成果にはかならない。

と厳しく断じている。

桂に代わつて政權の座に就いたのは薩州閥を背景にした海軍の山本権兵衛で、政友会を味方に取り込むことに成功した。陸軍はすぐさま反撃を開始した。翌一四年二月二十三日、横浜毎日新聞の創業者で立憲同志会の議員である島田三郎をして、ドイツのシーメンス社が海軍高官に贈賄していた事実を暴露、次いでイギリスのニッカーズ社および三井物産と海軍との癒着を攻撃した。

三井物産ならびに交詢社、政友会はここで防戦に回らず、山本内閣と物産役員を犠牲にしてなお憲法擁護運動を盛り上げた。結果としてライバル政党であつた立憲同志会（一九一五年十月「憲政会」に改称）に政權は譲つたものの、旧藩閥、軍閥の抑制に成功した。

山本権兵衛のあとを受けて首相に就任した大隈重信は、多分に帝国主義的色彩の強い思想の持ち主であつて、三菱財閥との関係が強かつた。しかし第一次大戦で対独宣戦を布告した手前、連合国軍が一樣に標榜する「デモクラシー」に賛同せざるを得なかつた。

こうした状況の下で、一九一六年（大正五）、東大教授の吉野作造が、雑誌『中央公論』一月号に長論文「憲政の本義を説いて其有終の美の済すの途を論ず」を発表した。

彼は第一次大戦直前のヨーロッパ留学で得た体験をもとに、「政治とは、一般民衆の利福を目的としなければならぬ」「政策の決定には一般民衆の意向を反映しなければならぬ」と説いた。

これに対して社会主義者の山川均が

——吉野論文は主権の所在を曖昧にしている。と指摘し、批判した。

今日の視点に立てば当然の批判であった。

だが吉野論文は、封建的制度や慣行を平和裏に、かつ積極的に改革する現実的な思想としてインテリゲンチヤに広く受け入れられた。資本家と政党と軍部が利権をめぐる三つ巴で足を引っ張り合う際の道具として使われてきた「デモクラシー」は、ここにおいて初めて思想的骨格を与えられることになった。

真つ先に反応したのは学生たちだった。東京帝国大学の進歩的學生が「新人会」を結成して社会改造運動をスタートさせたのははじめ、早稲田大学で「民人同盟」「建設者同盟」が発足し、これがのちの学生運動につながったほか、第一次大戦をきっかけとする空前の好況に反して一向に改

善されない就労環境への意識改革を促した。

労働組合の結成とストライキの多発と並行して、吉野が唱えた「民本主義」は農民運動とも結びつき、テーマは政治改革から社会問題に広がった。鈴木文治が結成した労働者組織「友愛会」は、労働者の品性・教養を高めることで労使の協調を訴え、資本家は労働問題の「安全弁」としてこれを歓迎した。

その友愛会の思想的骨格をなしたのは、賀川豊彦である。一九一七年にアメリカ留学から帰国し、神戸の貧民窟に入ってキリスト教の伝道をしている中で鈴木文治と知り合った。一九二〇年（大正九）に刊行した『死線を越えて』がベストセラーとなり、以後、友愛会の指導的地位にあった。しかし第一次大戦後の不況が、労使協調路線を変えた。

一九二一年に神戸で起こった三菱内燃機工場および、川崎造船所、神戸三菱造船所、三菱電機工場のストライキで、労働者を暴力団が襲撃して数十人の負傷者を出し、さらに歩兵二個大隊と水兵二百人、憲兵数十人が出動するに及んで、労働組合は闘争的組織に変質していく。

軍隊が出動し実弾を発砲するというのは、一九一九年三月一日から三か月にわたって繰り広げられた朝鮮半島における抗日・反日暴動（三・一独立運動）と無縁ではない。政府は日本人であろうと朝鮮人であろうと、抵抗を強く示

す者たちを武力で沈黙させる手法を採用したのだ。

この手法は最初は「止むを得ない措置」として実行されたかもしれないが、やがて政府や軍の常套手段となり、そのうち手段でなく体質になっていく。

一方、人道的見地から貧困問題に取り組んだ河上肇は「大阪毎日新聞」に連載した『貧乏物語』でマルクス主義的唯物史観を提示し、農本主義の立場から大地主と小作の問題を論じるうち、マルキシズムを鮮明に打ち出すようになる。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

山本権兵衛 やまもと・ごんべえ／1852～1933。薩摩（鹿児島県）に生まれ、一八七四年にドイツ戦艦で世界一周を果たした。九〇年「高千穂」艦長となり日清戦争に従軍、一八九八年第二次桂太郎内閣で外相、日露戦争では戦争回避論を唱えた。一九一三年首相、二三年に二度目の首相に就任し外相を兼務したがアナキストの難波大助が起こした皇太子狙撃事件の責任を負って辞任した。伯爵。

島田三郎 しまだ・さぶろう／1852～1923。江戸（東京都）に生まれ、昌平黌に学んだ。一八七四年（明治七年）「横浜毎日新聞」を興し、主筆として活躍した。一八八一年大隈重信らと立憲改進黨を結成し、九〇年から連続十四回、国会議員を務めた。雄弁家であつて、あだ名は「鈴木しゃべ郎」だった。足尾鉾山鉾毒事件の被害者を支援するなど社会活動家でもあつた。

大久保利謙 おおくほ・としあき／1900～1995。大久保利通の孫で貴族院議員を務めた。母方の祖父は日清汽船、日本郵船の社長を務めた近藤廉平（1848～1921）。

交詢社 こうじゅんしゃ。一八八〇年、福沢諭吉の提唱で結成された社交機関で、その目的は「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」とある。創立当初から學術研究者、官吏、商業・農業など広範な分野の会員が参加した。慶応義塾大学卒業生が多く就職した三井財閥との関係が強まった。

吉野作造 よしの・さくぞう／1878～1933。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て清王朝に招かれ政治機構の近代化を指

導した。帰国後、東京帝大助教授、一九一四年教授。「中央公論」を中心に文筆活動を展開した。

山川 均 やまかわ・ひとし／1880～1958。岡山県に生まれ、同志社大学中退後、上京して雑誌「生年の福音」を創刊した。一九〇六年「日本社会党」の結成に参加し、「平民新聞」を創刊した。一九一六年、堺利彦などと雑誌「新社会」を創刊、一八八一年に荒畑寒村（1887～1981）と「労働組合研究会」を発足、二〇年「日本社会主義同盟」に参加するなどボルシェビズムに傾いた。二三年「共産党」（第一次）に参加、二三年に逮捕・起訴され、「思想的危険人物」のレッテルを貼られた。第二次大戦後は社会党左派の思想的指導者となった。

鈴木文治 すずき・ぶんじ／1885～1946。宮城県に生まれ、東京帝国大学を出て出版社「秀英社」をへて「東京朝日新聞」に勤めた。一九一一年（明治四十四）ユニテリアン教会の社会事業部長となり、労働者を対象にした共済事業組織「友愛会」を結成した。これが一九年の「日本労働総同盟友愛会」を経て二一年「日本労働総同盟」に発展した。第二次大戦後は反共主義の立場で労働運動を指導したが、四六年の第一回総選挙の遊説中、仙台で没した。

賀川豊彦 かがわ・とよひこ／1888～1960。兵庫県に生まれ、アメリカ・プリンストン大学を出て一九一七年に帰国した。中学時代にキリスト教の洗礼を受け路傍伝道を行うなど宗教者としての体験から、帰国後も神戸の貧民窟で無料の巡回診療を行った。友愛会に参加し、一九一九年発足の「関西労働同盟」で理事長、川崎・三菱神戸造船所の労働争議を指導した。第二次大戦後、勅選議員となり、日本社会党の結成に参加した。川崎・三菱

神戸造船所の労働争議のとき、労働組合と関西労働同盟事務局の間をつなぐ連絡係を大宅壮一が務めていたという逸話もある。

河上 肇 かわかみ・はじめ／1879～1946。山口県に生まれ、東京帝国大学を出て農科大学（のち東京大学農学部）や学習院講師となった。一九〇五年（明治三十八）に発表した論文「社会主義評論」（ペンネーム「千山万水楼主人」）で論壇にデビューし、田口卯吉の自由貿易論に対して保護貿易論を展開した。『貧乏物語』はヨーロッパ留学から帰国し京都帝国大学教授だったとき、「大阪朝日新聞」に連載したものだった。

037 女性は太陽

第三十七

女性は太陽

一

大正デモクラシーを彩取ったのは、女性の社会進出だった。

男子による相伝が社会契約の了解となったのは十二世紀から十三世紀にかけてであって、長い人類の歴史にあつてはぐっと近世のことである。

女性は実名を残してはいないだけであつて、起居を差配し、文芸を創作し、家督の継承を左右した。

女性が表立つて活躍した時代は歴史が動いたときである。例えば飛鳥・大和における推古、皇極、斉明、持統、元明、元正の歴代女帝をはじめ、橘大郎女、額田王、蘇我倉山田石川麻呂、平城京における藤原光明子、橘三千代、阿部内親王、藤原薬子などがある。

戦国乱世の終局には、信長にあつて道三の一人娘・帰蝶、秀吉にあつて木下寧々、あるいは信長の妹・市の忘れ形見である茶々、徳川家康にあつて瀬名姫あるいは阿茶、前田

利家にあつて松などの名前を挙げるができる。

二十世紀に入つて女性の意識を変革した法制度は、おそらく普通選挙法であろう。選挙に際して財産・納税額・身分・教育・信仰や教養などによって制限を設けず、一定の年齢に達した者全員が平等に選挙権・被選挙権を有するという、こんにちの目からすると至極当然のことが明治末期から大正にかけては国家の大事として議論された。

衆議院議員選挙法の第五条に

①帝国臣民タル男子ニシテ年齢二十五年以上ノ者ハ選挙権ヲ有ス。

②帝国臣民タル男子ニシテ年齢三十年以上ノ者ハ被選挙権ヲ有ス。

と明記されたのは一九二五年のことだが、女性はその対象から外されていた。しかしそうであればこそ、女性たちはより強く自身の拠つて立つ場所を求めた。

われわれは前節でその実態をすでに見た。

米の高騰に立ち上がったのは、まず主婦たちであつた。

——米を安く売れ。

と迫る「女軍」に

——うちは商売やけん、売るも売らぬも勝手じゃろう。

と言いつ返したのも米屋の女房だった。

彼女たちにとって毎日の食事と子どもの養育は他に代えることができない大きな至上命令だった。中には米や野菜の入手に悩み果て、真冬というのに襟元をはだけ、冷水を浴びる母親まで出た。土饅頭を茶碗に盛って子どもに食べさせようとした女房もいた。精神に異常をきたすほどに死に物狂いであつたといつていい。

都市で暮らす女性にも意識の変化が起つていた。表面的な装いに限つたことではあつたにせよ、封建的な制度や慣習からの離脱を象徴してゐたといつていい。全国的にみれば大半が長髪を髷に束ね和装で下駄であつた中で、銀座の街を歩く女性の九九%までが断髪で洋装・革靴だつたといふ調査が、端的にそのことを物語つてゐる。

二

都会で暮らす若い女性の洋装化が一般的になつたということは、彼女たちが生む次の世代は最初から洋装で育つことを意味してゐた。一九二四年（大正十三）に文化服装学院、二六年にドレスメーカー女学院が創立されたのは、こうした状況を背景にしている。あるいは女性化粧品の資生堂が業績を伸ばし、『婦人倶楽部』『主婦之友』といった雑

誌が創刊された。

都市部では江戸以来「呉服店」を名乗つてゐた三越や松屋などが「百貨店」に姿を変え、カフエーやバーが誕生し、レビユーや少女歌劇が大流行した。「モダン」「ハイカラ」といふ言葉は、すなわち底辺で女性の解放と結びついてゐた。

この下地となつたのは、明治政府が外貨を稼ぐために奨励した紡績業の振興にあつた。そこで働いた女性たちは『女工哀史』が示すように、すべてが恵まれた環境にあつたわけではなかつた（片や個室を与え学問を受けさせ婚禮道具を持たせて送り出した紡績工場もあつた）が、女性が働くことで賃金を得るといふ社会的認識を定着せしめたことは間違いない。

それまでの家父長制の中での女性は、家庭に入つて炊事洗濯育児に従事し、舅・姑に仕え、夫に従う家庭内労働力としてしか、その存在価値を認められなかつた。ところが都市の発展が女性に職場を与え、その女性たちが都市の消費経済を支える構図が形成され始めた。

男が兵役に取られたので、電話交換や郵便配達、車掌、外交員、事務員、販売員、教員、記者などに女性が起用された。美容、洋裁、看護、タイピストなど女性ならではの仕事も発生した。のちに記すパンチカード式計算機の利用

においても、主に女性がカードパンチの仕事に従事した。こうした社会の動きを背景にしている。

さらに高等女学校への進学率が高まり、女性の知的欲求が刺激された。一九一八年（大正七）に東京女子大学が開校し、北海道帝国大学が初めて女子の入学を認めている。ただ、こうした動きは個々に展開されていて、女性の意識改革を定義し方向性を示す思想的骨格は用意されていなかった。

ここに三角錫子という女性が鎌倉女学校で教鞭を執っていた。

一八七二年（明治五）、石川県金沢の生まれというから、このとき三十八歳であった。女子高等師範学校（のち御茶ノ水女子大）を出た才媛であって、のち一九一六年、常磐松女学校（のちトキワ松学園）を設立した人物である。

その年の一月二十三日、逗子開成中学校（のち逗子開成学園）の生徒十二名が乗ったボート「箱根号」が、鎌倉七里が浜の沖合いで転覆した。学校に届出をしていなかったために、遭難の事実が判明するのに時間がかかった。

波間に浮かんでいた乗船者の一人、木下三郎を通りかかった漁船が救助し、小坪港に運んだ。彼は間もなく息を引取ったが、その末期の言葉から初めて事実が知られた。

小坪の昌平寺に救援本部が設置され、葉山警察署逗子駐在所、鎌倉警察署らが搜索活動を始め、横須賀警察や地元の多数の漁夫も搜索に加わった。しかし遭難者を発見することはできなかった。翌二十四日には横須賀鎮守府から駆逐艦も派遣されたものの、何も発見されなかった。

二十五日の午後になって行合川の沖約二キロの波の底に、徳田勝治が弟の武三を両腕にしっかり抱き、小学生だった末弟が兄の首にまわりついて横たわっているのが引き上げられ、その近くからさらに二遺体が発見された。北風が強まり、雪と濃霧で搜索は難航したが、天候が回復した二十七日、遭難から数えて五日にして全員が遺体で収容された。

事故から十五日後の二月六日は日曜日だった。

逗子開成中学校の校庭で行われた合同慰霊祭で鎌倉女学校の生徒達が鎮魂を歌った。三角錫子がジェレマイア・インガルス（のち「真白き富士の根」の詩を添えた。由来は忘れられつつあるが、その曲と詩の美しさがいまなお歌い継がれている）。

三

もう一人、奥村明という女性がいた。「明」は「はる」

と訓む。ただし「奥村」の姓は洋画家・奥村博の伴侶となつた一九四一年からの名乗りで、生家の姓は「平塚」である。

のち、「平塚らいてう」のペンネームで知られる。

一八八六年（明治十九）、東京に生まれた。父・定次郎は会計検査院の官吏だった。一九〇六年（明治三十九）、日本女子大を卒業したが、併せて津田英学塾に通い、国文学、哲学、宗教、英語、英文学になみなみならぬ才能を示した。五年後の一九一一年九月、日本女子大の同窓生四人と同人芸誌『青踏』を創刊した。

その創刊の辞に彼女は

「元始女性は大陽であつた」と書いた。

この言葉から筆者などは邪馬台国の女王卑弥呼を連想するのだが、彼女がこう書いた由来も、あるいはそうであつたかもしれない。自身、才能と能力にあふれ、自ら以て「新しい女性」を認じていた。

女子大を卒業した年の冬、東京帝大卒の小説家森田草平と駆け落ちし、那須塩原の尾頭峠に逃げた。当時、森田はすでに「夏目漱石の弟子」として知られていた。

——新進気鋭の小説家が、女子大を出たばかりの良家の子女と心中に走つた。

マスコミにとつてはこのうえない好餌だった。平塚らいてうを語るとき、この「塩原事件」が必ず引き合いに出されるのは、のちの森田に対するらいてうの態度によっている。

森田は一九〇九年、逃避行の様子を小説『煤煙』として発表した。これが好評となつて、長編『自叙伝』をものし、戯曲『袈裟御前』などで作家の座を確定した。これに対して彼女は臆することなく所信を述べ、自分との恋愛事情を小説と称して暴露した行為を痛烈に批判した。その批判が彼女の名声を高めた、ともいえる。

青踏社は自我と自立の意識ある女性や女性解放の賛同者から熱烈な支持を受けた。この結社が支持を得たのには与謝野晶子や長谷川時雨が参集したことが要因として挙げられる。のち、市川房枝、奥むめお、高群逸枝といった女性解放運動家を育て、女性の社会的地位向上を果たすべく、治安警察法改正など法制度の改革に尽力した。

青踏社に参加した女流作家のことを忘れることができない。

まず記すべきは小手川ヤエである。

一八八五年（明治十八）の六月、大分県臼杵市の造り酒屋の長女に生まれ、一九〇〇年（明治三十三年）に上京して明治女学院に学んだ。二年後、同郷の野上豊一郎が一高に

入学してより以後、豊一郎を介して寺田寅彦、夏目漱石の知己を得た。女学院を卒後、ロンドン留学から帰国した豊一郎と結婚して姓を「野上」に改め、〇七年に漱石の紹介で『ホトギス』に短編『縁』『七夕のま』を発表した。

「野上弥生子」のペンネームで知られる彼女の白眉は、一九二二年に発表した『海神丸』であらう。

漁船が時化にあい、漂流する。飲み水もなく、食糧が絶え、死んだ僚友の肉を食べて生き残った漁師の話を、骨太に描く。おそらく男であれば、あままで簡潔には描けまい。そこには夫豊一郎とともに探究した能の美学が潜んでいる。女性趣味的なロマンティズムを拒否し、荒々しい人生を直視した筆致もまた、大正の精神であったかもしれない。

ちなみに野上豊一郎は東大卒後、九州帝国大学教授を経て法政大学教授、四十六年学長、四十七年総長に就任し、五〇年二月に六十六歳で没した。妻・ヤエは長寿を得て、百歳まで一と月余を残して他界。

野上弥生子と入れ替わりに青鞥社に加わった奥むめおは、父親の教育姿勢を『野火あかあかと』に次のように書き残している。

がんこな父だったが、わたしに女だから勉強しなくともよいとはひとことも言わなかった。

「東京では女ばかりで立派な本を出している者たちもいる。頭がよければ文学者にだってなれるし、器量が良けりゃ女優にだってなれる。ムメオがもう少し美人だったら女優にでもするのだがなあ」とも言っていた。

貧しい行商人の家に生まれ、定まった家もなく、旅の空で住み暮らす中からも、女流作家が誕生した。野上にやや遅れて文壇に登場した林芙美子である。

明晰な頭脳をもつて尾道高女を卒業した彼女は、貧困の中で創作に打ち込み、長谷川時雨の目に止まった。女性による女性のための『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』がベストセラーとなった。暗い人生経験を日記体で記した小説が文学として評価される時代でもあった。

この章で筆者は、政治や経済や文化が、初めて大衆によって動かされた時代を描こうと考えた。政治や経済や文化は、〃かみよのかみ〃から十九世紀末まで一貫して、一部の特権階級に属する人々のものであった。彼らは大衆を常に、「無知蒙昧である」と規定することから出発し、また大衆も無知蒙昧でいるほうが楽であることを知っていた。

それが大正デモクラシーで変わった。「大衆の時代」が到来した。このことは、本書のテーマとは直接の関係を持

たないが、多くの読者は、「大衆の時代」が計算機を需要を顕在化したことを知っている。その端緒がこの時代にあった。

もう一つ、この時代は、次の歌どもにとどめられる伸びやかな精神を残した。

清水へ祇園をよぎる桜月夜

こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見で

さみしからずや道を説くきみ

あるいは次の詩は、当時の男性から発されることがなかった。

あゝをとうとよ 君を泣く

君死にたまふこと勿れ

末に生まれし君なれば

親のなさはまさりしも

親は刃（やいば）をにぎらせて

人を殺せとをしへしや

人を殺して死ねよとて

廿四までをそだてしや

与謝野晶子がこう謳った精神のことを、この節で書いた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

起居 ききよ…中華帝国における皇帝の日常生活の場。皇帝への面談（拝謁）が公式に認められない場合、起居の差配者や妃の側近者を介して私的に情報を提供したり文書を手交するなど、政治的な場として使われるようになった。

橘大郎女 たちばなノおおいらつめ／生没年未詳。万葉仮名の表記では「多至波奈大郎女」。敏達Ⅱ推古天皇の孫で厩戸王（いわゆる「聖徳太子」）の妃。厩戸王の没後、「天寿国曼荼羅繡帳」を作ったとされる。

額田王 ぬかたノおおきみ／生没年未詳。大海人王の妃となり、次いで葛城大王（天智天皇）の妃となった。万葉集を代表する女性歌人として知られるが、皇極朝から持統朝にかけて常に大王の傍にあった点で、決して装飾的な存在でなかったことがうかがわれる。

蘇我倉山田石川麻呂の娘で、中大兄王（のち葛城王…天智天皇）の妃となり、阿閉女王（元明天皇）を生んだ。

藤原光明子 ふじわらノこうみょうし／701～760。藤原不比等の娘で聖武天皇の皇后となった。母は橘三千代。藤原一族が天皇家の外戚として権力中枢を占めるきっかけとなった。悲田、施薬院などを創設した。聖武天皇没後は皇太后として発言権を増し「中台天平眞仁正皇太后」の尊号が贈られている。

橘三千代 たちばなノみちよ／？～733。県犬養氏の出自で美

努王の妻となり橘諸兄を生んだ。のち藤原不比等の妻となり安宿媛を生んだ。安宿媛が首皇子に嫁いで皇后（光明皇后）となるに及んで「大夫人」の地位を得た。

阿部内親王 あべないしんのう／717～770。聖武天皇の娘で七四九年即位して孝謙天皇、のち七六四年重祚して称徳天皇。重祚後は道鏡を重任し藤原一族をはじめとする官僚貴族の反発を買った。

藤原薬子 ふじわらノくすこ／？～810。藤原種継の娘で平城天皇の寵愛を得て権勢を握り、兄の仲成と共に謀して平城旧都への遷都を図った。八一〇年官位を剥奪されるに及んで平城上皇とともに東国に向かい兵を起こそうとしたが失敗し服毒した。

帰蝶 きちよう／1535～1612？「胡蝶」のほか、「濃姫」（美濃の姫「鷺山殿」（父・斎藤道三の鷺山城にちなむ）「安土殿」（安土城にちなむ）とも。斉藤道三の娘で織田信長に嫁いだ。尾張・美濃の連合を図ったが道三の後を継いだ斉藤龍興（さいとう・たつおき／1548～1573）に見切りをつけ、ついに美濃を織田家が制圧する画策に協力した。

本能寺で明智光秀軍と戦い信長とともに自刃したとされるのは後世の創作であって、天正十七年（一五八七）、織田信雄家中における高位な女性「あつち殿」、安土惣見寺蔵「泰厳相公縁会名簿」鷺山殿に「養華院殿要津妙玄大姉 慶長十七年壬子七月九日 信長公御台」と記されている。慶長十七年は一六二二年に当たる。

寧々 ねね／1548～1624。尾張織田氏の下級武士杉原家の娘として生まれ、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）に嫁いだ。秀吉の出世とともに発言権を持つようになった。子がなかったため、秀吉没（大阪城から退き京都の高台院に遁塞した。しかし秀吉子

飼いの郎党への影響力は絶大で、徳川家康は彼女の支持を取り付けるのに大変な努力をした。正夫人を意味する「北政所」、隠居地の名を取って「高台院」の異称がある。

市 いち／1547～1583。織田信秀の娘、信長の妹。東海一の美貌とうたわれ一五六三年近江浅井長政に嫁ぎ、茶々姫ら二男三女を生んだ。八二年越前柴田勝家に嫁いだが翌年秀吉軍が越前北の庄に攻め入ったとき勝家とともに自刃した。

茶々 ちゃちゃ／1567～1615。幼名は別に「野々」ともいう。秀吉の側室となり淀城に住んだので「淀君」と称された。一五九三年秀頼を生んだことから実権を握り、大阪城落城・豊臣家滅亡の原因を作った。

瀬名姫 せな・ひめ／？～1579。「築山殿」の異称がある。駿河今川氏の家臣関口家の出自で松平元信（のちの徳川家康）の正室となった。家康が岡崎に自立後、信長から甲斐武田氏に内通している嫌疑をかけられ、家康は抗しきれず殺害した。

阿茶 あちゃ／1555～1637。武田信玄の家臣飯田久右衛門の娘で今川氏家臣神尾弥兵衛に嫁いだ。一五八八年徳川家康の側室となり大阪夏の陣で徳川方使者を務めた。のち一位の位を受け「一位の尼」と異称された。「二位の尼」と異称された。

松 まつ／1547～1617。一五八八前田利家に嫁ぎ、秀吉による柴田攻めのとき夫利家に代わって秀吉との和睦に臨んだ。秀吉没後、徳川家からかけられた嫌疑を晴らすため自ら進んで人質となり十五年間も江戸で暮らした。加賀前田家百万石の基礎を築いた女傑とされる。利家没後、落飾して「芳春院」。

資生堂 一八七二年（明治五）、福原有信（ふくはら・ありのぶ／1848～1924）が日本初の洋風調剤薬局「開陽院診療所」

として東京銀座に創業した。このとき併設して「薬局資生堂」を開いたのが起りである。福原は海軍病院藥局長だったときに得た西洋の知識をもとに、医薬分業を実践した。資生堂の名称は中国古典『易経』の一節「至哉坤元万物資生」に由来する。この福原から大日本製薬、内国製薬、帝國生命保險が誕生した。

女工哀史 一九二五年、細井和喜蔵著。日清・日露戦争後、工場労働者の需要が急増した結果、貧農出身の若年女性が工員として採用された。女工は全工場労働者の六割を占めたといわれる。彼女たちは低賃金、苛酷な労働条件、粗末な寄宿施設と食事、罰金制度や強制貯金といった過酷な環境で労働に従事した。その実態を赤裸々に描写し、のちの労働条件改善運動の象徴となった。

日本女子大の同窓生四人 保持研子、中野初子、木内錠子、物集和子。

保持研子（やすもち・よしこ／1885～1947）は俳人として活躍した。

木内錠子（きうち・ていこ／1887～1919）は雑誌『婦人世界』記者だった。

物集和子（もずめ・かずこ／1888～1979）は二葉亭四迷、夏目漱石の指導を受け小説を発表した。

青踏 この名の由来には二つの説がある。一つは俳句の春の季語「青き踏む」で、新緑にあふれた春の野を歩くことを指す。「女性にとって冬の時代は終った」という意味が込められているという。

もう一つはヨーロッパで流行していた女性用靴下「ブルー・ストッキング」を直訳したとする説である。鹿鳴館時代に貴婦人たちが着用し、そもそも男性の礼装だったブルー・ストッキングを女性が着用することをもって婦人解放の旗印にした、という。



「面説とも一定の説得力があるが、平塚らいてうはブルー・ストッキングから「青踏」の名を思いつき、これに与謝野晶子が俳句の季語の意味を重ねたものらしい。

**青踏社の参加者** このとき与謝野晶子はすでに歌壇で名を成しており、平塚らいてうは三顧の礼をもって青踏社への参加を要請した。晶子をはじめ平塚の申し出を辞退することも考えたが、「女性の自立」という平塚の言葉に動かされた。雑誌『青踏』創刊号には、晶子の文章が冒頭を飾っていた。

**森田草平** もりた・そうへい／1881～1949。本名は「米松」といった。与謝野鉄幹が主宰する女子学生向けの「閨秀文学講座」で講師を務めたとき、平塚明と知り合った。

**与謝野晶子** よさの・あきこ／1887～1942。旧姓は「鳳」本名は「志よう」といった。「与謝野」姓は夫・鉄幹（本名「寛」1873～1935）の父・礼蔵（れいごん／1823～1898）が京都府与謝郡の出身に由来する。「志よう」は「晶」の音（し）ようで、それを筆名とした。歌人としてデビューした当初は「鳳晶子」の名だった。政治評論もしばしば行い、シベリア出兵については「日本の領土的野心を猜疑され、日露戦争の外債による国民生活の疲弊を再び起こす」、教育改革では「各府県市町村に民選の教育委員を設けること」を提案した。

**長谷川時雨** はせがわ・しぐれ／1879～1941。本名は「やす」（康子という説もある）といった。嫁ぎ先の「水橋」を名乗ったこともある。劇作家として活動し、一九二三年、女性による女性のための文芸誌『女人芸術』を発刊、のちタブロイド判新聞形式の機関紙『輝く』を創刊した。

**市川房枝** いちかわ・ふさえ／1893～1981。一九一七年

名古屋新聞記者となり、一九一九年「新婦人協会」を平塚らいてう、奥むめおなどとともに設立、併せて女性の結社を禁ずる治安警察法の改定を求めた。婦人参政権運動を主導したが、日中戦争・太平洋戦争の期間、国政に協力して女性の政治的権利を獲得するべきとして第日本言論報国会に参加、四七年公職追放のち五三年の第三回参院選で当選した。

**奥むめお** 1895～1997。旧姓は「和田」、本名は「梅尾」で「むめお」と訓む。新婦人協会のあと一九二三年に「職業婦人会」、二八年「婦人消費組合協会」を立ち上げた。一九四七年参院議員となり、四八年「主婦連合会」（主婦連）の会長に就任した。**高群逸枝** たかむれ・いつえ／1894～1964。本名はカタカナで「イツエ」といった。一九三〇年平塚らいてうらと無産婦人芸術連盟を結成し、『婦人戦線』を創刊した。女性運動の傍ら、『母系制の研究』『招婿婚の研究』などをまとめた。

**小説『海神丸』** 実際にあった遭難事件をもとに描いている。野上は第二次大戦後、事件の人物と面会し『後日物語』を書いた。**林芙美子** はやし・ふみこ／1903～1951。本名は「フミコ」といった。恵まれない家庭環境で、幼少期から少女期に下関、長崎、佐世保、鹿児島、直方と転々し、十四歳のときようやく尾道に落ち着いた。二十五歳のとき長谷川時雨が雑誌『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』が世に出るきっかけとなった。尾道本通り商店街（通称「芙美子通り」）西口に、芙美子のブロンズ像がある。

**君死にたまふこと勿れ** 一九〇四年（明治三十七）雑誌『明星』掲載。日露戦争のとき、新妻を残して旅順包囲戦に招集された弟・鳳壽三郎に送った。

# 日本IT書紀 03 未剖篇 卷之四 曙光

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。